Phantasma

triptych

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｈａｎｔａｓｍａ

【Ｎコード】
Ｎ６９３９Ｔ

【作者名】
ｔｒｉｐｔｙｃｈ

【あらすじ】
魔術が存在する世界。遺跡を巡る冒険屋の女性が見つけたのは旧世界で造られた一人の少年。これは、その少年の物語。

プロローグ（前書き）

ずっと昔に書きかけた作品です。暇つぶしに投稿。需要があるなら続きを書いてみようかと思っています。

プロローグ

序章　　Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

冒険屋、と呼ばれる者達がいる。大陸中に根を張る民生組織『ギルド』に所属する者達の一般的な呼び名だ。

彼らはギルドに寄せられた依頼をこなす事で金を稼ぎ、ギルドに集められた情報を頼り、世界を巡る。彼らの目的は様々だ。遺跡から旧世界の遺物を発掘し一攫千金を狙う者、未知を求めさまよう者、夢を追い求める者、そして常人には理解不能な感性から旅をする者――。

大陸の西端、グランス地方。その大森林地帯を歩く女性もそういった冒険屋の一人だった。背中には大きなバックパックを、腰には一振りの黒い剣を携え、彼女は森の中を突き進んでいた。

樹齢千年を超える大樹が所狭しと生え揃う森の中は昼間であろうと枝葉に日の光を遮られて薄暗く、地上に出た木の根は人の足をたやすく阻む。だが自身の身長の二倍はあろうかという木の根を一足で飛び越えながら森を進む彼女の足に迷いは無い。

やがて彼女の目の前に現れたのは崩壊した遺跡だった。コンクリートという建材で作られたその建築物はいまや粉々に崩れ落ち、土の中にその身を半分沈めていた。

それを見た女性はバッグから地図とメモを取り出すと、それを確認して満足げに頷く。

「うん、ここまでは情報通り。後はここから九時の方角に進めばいいのね」

メモに書かれているのはギルドで手に入れた新しい遺跡の情報だ。

この樹海の中で発見されたという旧世界の遺跡。そしてそこから持ち帰られた遺物の情報を知った彼女はその遺跡を調査するべくこ

のグランス大森林へと踏み込んだ。
彼女の目的は旧世界の技術を知り、必要とあればそれを抹消すること。
彼女は過去に幾度もこうして遺跡を訪れ、そこに残された技術を取得し、危険と判断した技術については遺跡ごと闇へと葬ってきた。
今回彼女が入手した情報によると、この大森林の中で木々に破壊されることなく、未だかつての外観を保った遺跡が見つかったという。それだけの強度を持った施設となると何らかの重要施設であった可能性が高い。経験上そのことを知っている彼女はギルドの情報を頼りにこの大森林へと踏み込んだ。
めぼしい遺物は既に持ち去られているだろうが、そちらは解析できるだけの技術が現在(いま)はない。彼女からすれば放っておいてもよい代物(しろもの)だ。
それよりも彼女にとって重要なのは、まだ遺跡に残されている個人では持ち出せない設備だ。もしそれらが危険な技術を後世に伝えるものであるならば、人間の手に渡る前に破壊しなくてはならない。
だが木々の根から根へ飛び跳ねる彼女の顔には笑みが張り付いている。彼女はこうして旧世界の名残に触れるのが好きだった。
旧世界。今となっては彼女しか知る者がいない世界。そのいかんともしがたい寂寥感を遺跡と遺物は一時の間とはいえ埋めてくれる。

「九時の方角は……あっちか」

バッグから方位磁針を取り出し、方角を確認する。情報通りなら、ここから真っ直ぐ一直線に行けば目的の遺跡に着けるはずだった。
道具をバッグに仕舞い直すと、彼女は森を駆け始める。
木の根から次の木の根に飛び跳ねる彼女は、この縮尺の狂ったような巨大な木々の中ではまるでノミの様に小さかった。最初に遺跡を発見した人物は一体何を考えてこのような森へ踏み込んだのだろうか、などと彼女は考えたが、それについては思考を放棄した。大

陸の五割はこのような森林に覆われているし、そもそもこのような森林を作ったのは彼女なのだ。自分に自分で文句をつけていてもしょうがない。

走り出して一時間も経っただろうか。彼女は木の根から飛び下り足を止めた。彼女の目の前には、木々に圧迫されその身に亀裂を入れながらも二千年以上の時を耐えてきた円筒状の遺跡があった。

白かったであろう外壁は茶色の染みが浮かび、窓には割れたガラスの破片がくっついている。外から見る限り階層は三階。ただし妙に木の根が地上を這っている所を見る限り地下層もある可能性も有った。

「ま、それは入ってみてからのお楽しみ、かな」

そう一人呟くと、彼女は遺跡へと足を踏み入れた。

遺跡の三階、天井の崩落した部屋で彼女は遺跡の上を這う枝を眺めてため息をついた。

「ここまで全滅、と。ここまで何もないと返って清々しいわねー」

この部屋に来るまで、彼女はメモにマップを書き込みながら一部屋一部屋丹念に調べつつ上がってきた。その結果得られた成果はゼロ。大型の機械の類(たぐい)は全く見当たらなかった。持ち帰られた遺物の中に小型の情報端末も有ったらしいが、そちらも野ざらしの状態では無事なわけがない。ここが何の施設だったのか、これでは分からずじまいだ。

「およ？」

ふと、彼女は妙なことに気付いた。あまりに何も無さ過ぎる。旧世界を滅ぼした災害、『大衝突（カタストロフ）』。この施設もその影響を受けたのなら、当時この施設にいたはずの人間の死体――骨くらいは転がっていてもいいはずだ。

彼女はメモを見返してみた。一階から三階まで同じような構造をしているが、一階に不自然に何もない区画が存在している。

「……調べてみよっか」

口元に笑みを湛えたまま彼女は一階へと階段を下っていった。そしてある壁の前に立ち、観察を始める。その壁は他の壁と違い、ひび一つ入っていない。彼女がその横の壁を調べるとひびに混じって縦に走る溝と小さなランプが壁にはめ込まれていた。

「カードリーダー。当たり、かな」

ひびの入っていない壁の前に立ち、彼女は深く息を吸った。そして――

「ふっ！」

気合一閃。回し蹴りが壁に叩き込まれた。轟音を立てて壁がくの字に折れ曲がり内側に吹き飛ぶ。そして彼女の前にはぽっかりと四角く闇が口を開いていた。数秒して下から重い金属がぶつかる音が響く。彼女が闇に目を凝らすと、下に降りる階段がかすかに見えた。

「ビンゴ」

楽しげに彼女は呟くと、人差し指を立てた。その指先に白い光が

生まれる。
魔術。人間が試行錯誤の末に編み出した自然干渉法だ。その中でもこの明かりを生み出す魔術は子供でも使える初歩の魔術である。
照らし出された階段を静かに彼女は下っていった。その紅潮した頬は彼女がいかに興奮しているか物語っている。そして階段を下り一歩踏み出した次の瞬間、彼女は息を呑んだ。
照明だ。人工的な照明が彼女が地下層に踏み出した瞬間点いたのだ。
「センサー式の照明！？　ううん、それよりも発電施設が生きてる……！」
天井からの照明に照らし出されたのは左右に伸びる広い通路。彼女は興奮を隠せぬまま、とりあえず右へと足を進めた。
手近にあった扉を開ける。同時に部屋の照明が点いた。そこにあったのはテーブルの上でほこりを被っている幾つかのディスクと書類、そして床に転がっている白衣を着た白骨だった。
「上の施設はダミーで地下（こっち）が本命ってわけね。何かの研究施設だったのかな」
彼女は変色しきった書類に手を伸ばす。すると書類は彼女が触れた先から崩れてしまった。
仕方がないので彼女はディスクだけを回収することにした。これらにどれだけ情報が残されているのか不明だが、それは古巣に帰って確かめてみないと分からない。
そして幾つかの部屋を見て回るうちに分かったことがある。この施設は何らかの生物の研究をしていた。それもおそらくは、人間の。
まず彼女が目をつけたのは透明な液体に満たされたガラスの円筒形の装置だった。それも人間が楽々収まる大きさの。俗に培養槽と呼ばれていた装置だ。
そしてごてごてと機械に修飾された背もたれのついた椅子。椅子

の上部には人間の頭に嵌めるための半球状の装置があり、両手、両足を固定する拘束具も見られた。脳に直接情報を入力する装置。彼女の古巣にも同じものがあるが、この機械は成熟した自我を持つ人間に使用すると自我に悪影響を与える危険性がある。おそらく、あの培養槽で生まれた人間に基本的な言語機能、運動機能を入力するために使われていたのではないかと彼女は推測した。

転がっていた白骨死体の数は右の通路の部屋だけで十八体。秘匿研究所にしては人数がやや多い気がしたが、警備員を含めるならばそれほど不自然には思わない。

そして階段から左の通路に彼女は足を向けた。彼女の中ではこの施設の抹消は決定事項だったが、その前にこの施設の目的について知っておく必要があった。

目的の部屋はすぐに見つかった。電算室。扉を開けると、室内には幾つかのモニターとコンピュータの端末機が設置されている。端末機のコンソールをいじってみると、無事端末機は起動した。モニターに表示された画面を見て、彼女はコンソールをいじっていく。

「研究内容は、と。……あった」

リサーチと書かれたフォルダを開き、その中の研究題目と書かれたファイルを開く。そこに書かれている内容を見て、彼女は絶句した。

「……プロジェクトコード、『Ａｎｇｅｌ』。天使を創る研究、ですって……？」

そして部屋中に彼女の笑い声が響き渡った。大きく体を曲げて、腹を抑えて彼女は笑っている。

「あはははは！　天使？　天使ですって？　そんな、私と似たよう

なことを本気で考える馬鹿がいたなんて！　あー、可笑しい。あは、あはは……！」

ひとしきり笑い終えた後、彼女はフォルダに納められた幾つものファイルを開いていく。

「生産されたサンプルは三百五十二体。その内成功例はたったの一体のみ。残りの失敗作は廃棄処分……」

サンプルとはあの培養槽で人工的に作られた人間のことだった。それを廃棄処分するということはすなわち、殺すということだ。

彼女は目を鋭くして成功例から得られたデータを吟味していく。そして落胆のため息をついた。

「これだけの犠牲を出して、得られたのは羽を出して飛べるだけの人間？　遺伝子操作の方面からアプローチするのは一緒だけど、私とは真逆の存在を作ろうとしたのね。……でも、効率の悪いやり方ねー」

すっかり熱の冷めてしまった彼女は画面を惰性でスクロールさせていく。だが最後の一文を目にして彼女は目を見開いた。

『成功例のサンプルは冷凍睡眠（コールドスリープ）状態で保存し、これをモデルケースとして量産を開始して実験を進行する』

彼女は慌ててファイルの更新日時を確かめる。最後に更新されたのがこのファイルだった。つまり、この後に『大衝突（カタストロフ）』が起きたのだ。

「つまり、まだこの成功例のサンプルは生きている可能性がある……？」

彼女はコンソールをいじってサンプルの保管場所を確かめ、電算室を飛び出した。向かう先は通路端の部屋。飛び込むようにして部屋に入った彼女を待ち受けていたのは、カプセル型の冷凍睡眠筐体（コールドスリープポッド）だった。覗き込むと小さな子供が裸で眠っているのが見て取れた。

彼女は筐体（ポッド）の横に備え付けられたコンソールを操作し、冷凍睡眠（コールドスリープ）を解除した。

ヴン、と音を立て筐体が震え始める。子供の肌に熱が戻り、血が通っていくのが見て取れた。機械からは低温の霧が噴出し、ガコン、と音を立てて筐体（ポッド）の蓋が開く。

「気持ちよさそうに寝てるわね……」

いたずらしちゃうぞー、と彼女が呟くと、身の危険を感じ取ったのか子供はうっすらと眼を明けた。

「あ、起きた？　日本語わかる？　英語じゃなきゃだめ？」

「日本語、話せます。十三ヶ国語を強制入力（インストール）されています」

女性の質問に事務的な口調で答える子供。そして子供は身を起こすと女性の顔を見つめ始めた。

「どうしたの？　体におかしい所でもある？」

「体に問題はありません。その――」

平淡な口調で答えていた子供の眉が少しだけ寄せられる。

「あなた、誰ですか？」

初めて子供は自分から言葉を話した。女性はその問いに口元を吊り上げる。

「私？　私はね――」

一呼吸おいて、彼女は満面の笑みを浮かべて答えを口にした。

「――魔王よ」

それから十年の月日が過ぎた。遺跡のあった場所にはすり鉢上に抉られた地面が残るのみ。何もかもが跡形も無く消失していた。

そして天使の子の物語が今、始まる。

？　魔術　――Miracle――

学園都市ティレク。湖に面し、森に囲まれたその町の最大の特徴は、町の面積の六割を占める巨大な学園だ。

名を第七学園。ギルドが経営する大陸に八つ存在する学園の一つ。

ここでは冒険屋の他、ギルドの依頼をこなす魔術師、遺物の研究家、錬金術師、医療士など様々な人材が育成される。

だが学園出身の冒険屋は他の冒険屋から現場を知らないと実力を下に見られがちで、実際に学園にも通わず冒険屋になるものはどいつもこいつも規格外な者が多い。しかしギルドからしてみればまともに言う事を聞いてくれる冒険屋は幾らいても足りないわけで、こうして一定以上の実力を持った冒険屋を育成して世に輩出しているわけなのだ。

冒険屋を志す者たちには、自らの実力に限界を感じ、進む道を変える者も多く出る。その逆に、飛びぬけた実力を発揮して学園内に名をはせる者もいた。

図書館で一人本を熟読している少年、ヴァイスもそのうちの一人である。

白い上着に黒いズボン、体型は中肉中背。柔和な印象を与える童顔で、見る者を和ませる。特徴的なのはやや長めの雪のように白い髪と、青の瞳だ。その白い髪は後ろで括（くく）られ小さな尻尾のようになっている。

木製の椅子に座り本を読みふける彼の手元には、メモらしき紙に幾つかの文章と幾何学文様の図形が描かれていた。

「魔術とは世界に遍（あまね）く存在する魔力素に魔力で干渉し、それに共振する事で何らかの効果を発生させる行為である。また悪魔が使うとされている魔法とは摂理を改変する行為であり死者を再び蘇らせることすら可能だとされて――」

本の序文をそらんじた後ヴァイスは人差し指をたてる。そして指先を眺めること一分。ヴァイスは手を下ろすとため息をついた。

「やっぱり駄目か……」

「何が駄目なの？」

唐突にヴァイスの後ろから声がかけられた。ヴァイスは頭をかくと、椅子をそのままに後ろに向き直って先ほどまで読んでいた本を差し出した。

そこには透けるような薄い金色の髪を後頭部横で二つに括（くく）った少女がいた。白いシャツと紺色のスカートに黒いローブを羽織っている。端正な顔立ちとやや低めの鼻、桜色の唇にきりっとした眉と意志の強そうな大きく紅い瞳。まぎれもなく美人だ。惜しむらくはその慎ましい胸だろうか。しかしその細い手足には見た目からは想像もできない力が宿っていることをヴァイスは知っている。

少女は本を受け取ると、その題目に目を見開いた。

「魔術概論……？　ヴァイス、もしかして――」

「うん。魔術を使おうとしてた」

そう、ヴァイスは魔術を使えない。五歳児ですら使える光を生み出す魔術、『照明（ライト）』すら使うことが出来ないのだ。

「どうしたの？　急に魔術を使いたいなんて」

「あはは……。誕生日までに召喚術を使えるようになりたくってさ」

自嘲を交えた苦笑いで返すヴァイスに少女がため息をつく。

「もう諦めていたんじゃなかったっけ？　それに『マジックキャン

セラー』が魔術を使えたら反則だよ」

『マジックキャンセラー』。ヴァイスの持つ二つ名だ。ヴァイスは魔術を使えないが、代わりに魔力をかき消すという特異な能力を保持している。ヴァイスは魔力によって高い身体能力を得ている人間や魔獣にとって天敵なのだ。

「それにしても召喚術？　そんな高度なものを？」

「うん。どうしても出来るようになりたいんだ」

召喚術とは空間を飛び越えて何かを呼び出す魔術である。主に精霊が対象となるが、過去には悪魔を召喚した例も残されている。

精霊は自然に関して絶大な力を持つ。たとえば木の精霊を呼び出したなら治癒（キュア）を初めとした生命力を扱う魔術を増幅させられるし、土の精霊を身に宿したならば身体能力が強化され肉体も堅牢なものとなる。

しかし召喚術は高度な知識と適性が必要とされる。学園でも使える者は僅かだ。

「理由を聞いていい？」

「うーん。今は秘密」

ヴァイスの返事に少女はため息をついた。ヴァイスはこれで口が堅い。無理矢理聞き出そうとしたところで教えてはくれないだろう。

「今はってことは、ちゃんと教えてくれんだよね」

「うん。イリアにはちゃんと教えるから」

その返事に少女――イリアは口元を緩めた。イリアの小さな笑みにヴァイスも柔らかな笑みを浮かべる。イリアは本をヴァイスに返

すと、顔を真剣なものに変えた。
「お姉ちゃんに相談してみる？」
イリアの言葉にヴァイスはこれ見よがしに大きくため息をつくと、椅子から立ち上がった。
「アリスかー……」
「お姉ちゃんの方がこういうことには役に立つから。……ボクじゃ力になれないみたいだし」
「できることなら余り人には頼りたくはなかったんだけどなー。まあ、仕方無いか」
本を棚に戻し、図書館を後にする二人。日は西に傾いている。あと二時間もすれば夕日が世界を赤く染め上げるだろう。
イリアに手を引かれながら、ヴァイスは女子寮へと向かった。学園は全寮制で、男子寮と女子寮は向かい合わせに造られている。
イリアがこうしてヴァイスを部屋に連れ込むのは今に始まったことではなく、寮内ですれ違う女子達からも普通に挨拶の声が飛んで来る。男子寮のマスコットとされるヴァイスは女子達の間で愛玩動物として人気があるのだ。
「そういえばイリアはどうして図書館にいたの？」
女子寮の階段を上がりながらヴァイスが質問する。
「んー。使えそうな魔導書がないか探してたんだよ。近頃はいいインスピレーションが浮かばないから。結局見つからなかったんだけどね」

イリアもヴァイス同様異名を持っている。『スペルマスター』。複雑な詠唱と魔法陣が必要とされるような大魔術を、ただ魔力を放出するだけで使えてしまう魔導の天才。イリアはそれだけでなく新しい魔術の開発にも手を出していて、オリジナルの魔術を十以上創りだしている。

超一流の魔術師であるイリアは、どういうわけか冒険屋を目指してこの学園にいる。魔術科の教師達からは姉のアリス共々魔術科に誘われているのだが、全て断っているらしい。

女子寮五階の一番端、そこにイリアの部屋はあった。イリアはその隣の部屋の扉をノックする。

「……入っていい」

中から抑揚に乏しい返事が返ってきた。イリアが扉を開く。

そこは、異界だった。

部屋に入ってまず目に入るのは苦悶に顔を歪め、救いを求めるかのように手を天に伸ばした人間の彫刻。次いで青やら黄色やらに発光している棚に並べられた珍品の数々。窓は暗幕のようなカーテンで締め切られ、薄暗い部屋の壁には女神のように微笑む女性が血の滴る人の生首を優しく抱く絵が激しく自己主張している。敷物は原色がこれ以上ないぐらいにごった返しており、この部屋の混沌とした状態を見事に表していた。

はっきり言って、趣味が悪すぎる。

ポウ、と光が灯った。部屋の奥から少女が幾つもの光球を周囲に

纏って歩いてくる。
照らし出された少女は、良くて中等部、普通に見れば初等部の子に見えるほど背が低かった。ゆったりとした黒いローブに身を包み、イリアと同じ金の髪を肩で切り揃えられている。そのルビーの様な紅い瞳をヴァイスに向ける少女の顔立ちはイリアとよく似ていたが、その表情からは活発なイリアとは正反対の静かな印象を受ける。まるで人形のような少女は、その能力ゆえに畏怖されながらも一部の豪胆な女子達に女子寮のマスコットとして熱烈に可愛がられていた。
少女の名はアリス。『マスターマインド』の異名を関する魔女である。

「ようこそ。イリア、ヴァイス」

無表情ながら、アリスはどこか喜んでいるようにヴァイスの目には映った。六年間付き合って来た身だ。表情に出ないアリスの心の動きが、ヴァイスにはなんとなく分かるようになっていた。

「お邪魔するね、アリス」
「お邪魔します、お姉ちゃん」

部屋に入ると、アリスは二人の手を取りベッドへと案内した。アリスを中央に据えて、その両脇に二人が座る。ヴァイスの記憶が確かならば、アリスは初めて会った時からこのぐらいの背丈だった。かつては三人とも同じくらいだった背は、今ではアリス一人が取り残されたように変わっていない。

「それで、今日はどうしたの？」
「ヴァイスがね、召喚術を使いたいって」

アリスの問いにイリアが答える。それを聞いて、アリスはヴァイ

スの目を覗き込んだ。

「……正気？」

「それは酷くない？　せめて本気と聞かれるかと思ったよ……」

改めて脱力するヴァイス。

「何を喚び出したいの？　私なら大抵は喚び出せる」

「一応、僕が喚び出したいんだ。何を喚び出したいのかは秘密」

アリスのやや細めな眉が八の字になる。どうやら秘密というのが気に入らないらしい。

「じゃあ喚び出すときに立ち会ってもらうから、どうやったら魔術を使えるようになれるか教えてもらえる？」

その言葉でアリスの機嫌は直ったようだった。アリスの身に纏う空気が穏やかなものとなる。

「分かった。まずは貴方が既存の方法では魔術が使えない理由を教えてあげる」

アリスの周囲に小さな白い光球が幾つも生まれる。それらはアリスの周りをゆっくりと回転しながら浮遊していた。

「魔力素は世界の裏側にある。私達はこれに干渉し、引き出す力――魔力を持つ。この引き出した魔力素を用いる事で、私達は魔術を使う」

そして小さな光はヴァイスに向かっていき、しかしヴァイスに触

れることなく消えてしまった。

「貴方はこの魔力素を世界の裏側に戻してしまう力を持つ。だから貴方に魔術は届かないし、貴方も魔術を使うことは出来ない」

「待って、アリス。僕は一つだけ魔術を使えるし、前にアリスの攻撃を受けたこともあったよね」

その言葉に頷くアリス。かつての魔術の実習の時、アリスが放った光弾が無効化されずにヴァイスを吹き飛ばした事件があったのだ。

「私と貴方、どちらも魔力素に干渉する力には変わり無い。私の干渉力が上回ったから貴方は魔術を無効化できなかった。でもその力を意識して使えるなら、貴方は魔法でさえも無効化することが出来る」

「魔法でも、とは大きく出たね」

「事実だから」

平淡な口調で話すアリス。それが事実なら、ヴァイスは伝説上の悪魔にだって勝てるかもしれない。

「お姉ちゃん。ヴァイスの『飛翔（フライト）』は？」

「『飛翔（フライト）』は魔術や魔法とは原理が違う。あれは体内に魔力素を吸収して使っている。飛行中背中に見える光の羽は、魔力素が吸収されているのが見えているだけ。だからヴァイスは空を飛ぶ時のように魔力を吸収して使えばいい」

「簡単に言ってくれるね……」

魔力素を吸収して使う、というのはヴァイスにもなんとなく分かった。ヴァイスが唯一使える魔術、空を自在に舞う『飛翔（フライト）』。目立つのを嫌ったためこの二人の前でしか使ったことはなかったが、確

かに発動中には体の奥底が熱くなるような感覚があった。あれが魔力素を吸収しているということなのだろう。

「……報酬」

「え？」

とぼけた声を上げるヴァイスにアリスは抱きついた。女の子特有の柔らかな体がヴァイスの胴体に押し付けられる。

「これが報酬なの？」

「そう。貴方は私に抱(いだ)かれる」

両手をヴァイスの体に絡ませたままヴァイスを見上げるアリス。その瞳は深く底が見えない。

「いいなあ、お姉ちゃん。ねえ、ヴァイス。次はボクの番だよ」

「駄目、恥ずかしいから」

ぶーぶーとブーイングを口にするイリアに苦笑する。アリスもイリアもこうした抱きつき癖は変わっていない。

「ところで、いつまでこうしていればいいんだ？」

「私が満足するまで」

抱きしめる力を強めるアリス。そこで妙な寒気がヴァイスの背筋を走った。

「ねえ、アリス。もう離れてもらえない？」

「嫌」

いつの間にか、ヴァイスの首から下が動かなくなっていた。脳からの命令を受け付けなくなっている。だが、気付いてしまえばそれまでだ。自分の体だ。自分の自由にならないはずがない。まずは体の末端から力を込めていく。すると、手足が指先からゆっくりと自由を取り戻してきた。

「もう少しで貴方の心が覗けたのに……」

残念そうに呟くアリス。その様子にヴァイスは苦笑する。

「こういう真似をするから魔女って言われるんだよ。もう少し優しくしてくれない？」

「私のモノになったらうんと優しくしてあげる」

「流石にそれは勘弁だよ。それに心なんて覗かない方が面白いと思わない？」

ヴァイスの言葉に押し黙るアリス。そしてアリスはそっとヴァイスの体を解放した。

「貴方の心は覗き込めない。感情の色をうかがうことしか出来ない。でも、確かに予想もしていなかった心を掻き乱し惑わす言葉は私をこの上なく悦(よろこ)ばせる」

そう言うとアリスは小さく口元をほころばせた。それにヴァイスも力を抜いて笑みを浮かべる。

「もう、お姉ちゃんったら……」

呆れたようにイリアがため息をこぼした。アリスがヴァイスにちょっかいをかけるのはいつものことだ。ただ今日は少し危なかった。

もう少し気付くのが遅れたらヴァイスは身も心もアリスのモノになっていただろう。にもかかわらずヴァイスは平気な顔で笑っている。こういうことは慣れっこなのだ。

「でも助かったよアリス。ありがとう、頼りにしてる」
「いつでも頼っていい。私はいつも貴方を待っている」

幼い容貌ながら妖艶に微笑むアリス。その表情と告白ともとれる言葉にヴァイスは一瞬固まってしまう。アリスから視線を逸らすと、不満げにヴァイスを見つめているイリアと視線が合った。

「むー。お姉ちゃんとヴァイスだけ仲が良い……」

そう言ってイリアはむくれてしまう。イリアがこうなってろくなことがあったためしがない。ヴァイスはアリスの頭越しにイリアの頭にぽんと手を置いた。

「僕はイリアのことも大好きだよ？」
「あ、うん。ありがとう！」

イリアは元気いっぱいに笑う。ヴァイスは内心で安堵の息をついた。とりあえずはどうにかなったらしい。
しばらくしてイリアの頭から手を下ろすと、イリアはベッドから立ち上がった。

「ヴァイス。練習に行こうよ」
「練習？　魔術の？」
「うん。お姉ちゃんも一緒に」

イリアはヴァイスとアリスの手を取ってベッドから立ち上がらせ

た。ヴァイスは苦笑して、アリスはため息をついてそれに従う。それはいつものことだった。イリアが先陣を切り、ヴァイスとアリスはその後を付いていく。六年前から変わらない関係。

女子寮を出て、学園裏の森の中へと入っていく。木々の巨大な根がそこかしこに突き出ていたが、三人はそれらを軽々と飛び越えて進んでいく。一般に強い魔力を持つものほど身体能力も高いと言われている。無論、例外もあるが。

やがてたどり着いた場所は、この森の中でも一際背の高い大樹の下だった。

ここはイリアの魔術の練習場所だ。大樹には幾つも大きな――しかし大樹の全体からしてみれば微細な――傷跡があった。

空を見上げると葉の隙間から陽光が零れ落ちている。この木の周りは森の中でも比較的明るい。

イリアとアリスは大樹の根の上にちょこんと座る。根の間に立ち二人を見上げるヴァイスは、二人がまるで伝説の妖精のように思えた。

「じゃあ、始めるね」

二人に声をかけると、ヴァイスは目をつむりへその下辺りに力を入れた。空を飛ぶときの体が熱くなる感覚を思い出し全身に力を入れる。すると、体の奥から力が湧き出るような感覚を覚えた。

その力を右手に集中させる。光を生み出す魔術、『照明（ライト）』。初歩の魔術を使うべく魔導式を脳に浮かべる。だが目を開いてみてもその手に光は生まれていなかった。

「ヴァイス」

「なに？」

アリスから声をかけられ上を見上げる。

「それは魔力素を世界の裏側に追いやる力。魔力であることに変わりはないけど、それでは魔術は使えない」
「そう……」
淡々と告げられた言葉にヴァイスは落胆する。力の挙動が掴めたと思ったら、どうやら違ったらしい。
「ねえ、ヴァイス。まずは空を飛んでみたら？」
イリアがそう提案してくる。そういえば空を飛ぶのも久々だった。肩から力を抜き、体が軽くなる感覚に身を任せる。
「『飛翔（フライト）』」
イメージを固定する言葉と発すると共に体が羽のように軽くなり、ゆっくりと体が上昇していく。ヴァイスは二人と同じ目線の高さで上昇を止めた。
首を捻り、背を見返す。そこには白い光が羽のように広がっていた。
「それが魔力素。世界の裏側に満ち、摂理に反する現象を生み出す力」
アリスが歌う様にそう言った。ヴァイスは背中の光を強めようとしてみるが、さっぱり制御がきかない。しばらく木の周りを飛び回ったり停止して魔術を使おうとしてみたが、魔力の扱い方はつかめずじまいだった。
ヴァイスは二人の座っている根の上に降り立つ。同時に背中から広がる光が宙に溶ける様に消えた。

「やっぱり思うようにはいかないね」
「なら、貴方の代わりに私が喚ぶ。貴方は何を喚ぶのか教えてくれるだけでいい」

ぼやく声にアリスが魅力的な提案を差し出す。目を見ると、そこには期待の色が見て取れた。

「代償はなに？」
「貴方自身。貴方は私のモノになる」

これも昔からの彼女の口癖のようなものだ。初めて会ったときから、彼女はヴァイスに興味を寄せていた。

「あはは。じゃあ駄目だね。僕は僕自身のものだから、そう簡単にはあげられないや」
「……残念」

アリスは立ち上がると、宙に浮き上がった。『浮遊』。さして難しくない、熟練者が使えば高速で空を飛ぶことも出来る一般的な魔術だ。空を飛ぶまでいかずとも、高いところにジャンプするために大抵の人間は修得している。
アリスに続いてイリアも宙に浮いた。二人に倣うようにヴァイスも背中から光の翼を生やして宙に浮く。

「ねえ。この木のてっぺんまで行ってみようよ」

イリアはそう言うと、アリスとヴァイスの手を掴んで上に急上昇した。重さのない二人は引っ張られるまま上へと引き上げられる。森の木々を抜けると、そこには山の上で赤い光を放つ夕日があった。

「うわあ、綺麗……」

イリアが歓声を上げる。赤く照らし出され輝く湖と、それを取り囲む森。それは確かに壮観だった。

「ねえ、このまま飛んで帰ろうか」

イリアの提案はとても魅力的だった。この景色をもっと眺めていたい。ヴァイスはイリアの手を握り返すことでそれに答えた。アリスも異論はないようでイリアの手を握っていた。

イリアが二人を引っ張って、ゆっくりと森の上を学園に向けて飛んでいく。赤く煌(きらめ)く湖を、赤く染まった市街地を、しっかりと眼(まなこ)に焼き付けていく。

やがて三人は寮の裏手に舞い降りた。ヴァイスの背中から光の羽が消える。

「それじゃあ、また明日ね」

「諦めたら私に頼む。貴方の代わりに喚(よ)び出してあげるから」

「あはは。まあ頑張ってみるよ」

手を振って二人と別れるヴァイス。魔術を使うことは出来なかったが、それでも貴重な情報が手に入った。

空を飛ぶのは生まれて初めて起こしたたった一つの奇跡だ。今までは呼吸をするように自然に行なっていたが、それを解体して新しい奇跡に変換するというのはとても難しい作業に思えた。だが、手応えがないわけでもない。おぼろげながら感触は掴めた、と思う。

「夜にもう一度練習しておこうかな」

一人呟き、ヴァイスは男子寮へと向かった。
男子寮に入る。ロビーに入るなりよく見知った顔と遭遇した。

「コーラル先輩」
「お、ヴァイスか。どうだ。元気にやってるか？」

そう言って笑いかけるのはやや筋肉質な日に焼けた男だった。ヴァイスより頭三つ分くらい背が高い。髪はライトブラウン、顔立ちは整っていて爽やかな笑みを浮かべている。ヴァイスより一つ年上のこの男子は、高等部に上がって隣同士の部屋になって以来色々とヴァイスの面倒を見てくれていた。やはり冒険屋を目指していて、得意とするのは剣。その腕前は学園随一で『ソードマスター』の異名を冠している。教師でさえ剣で彼に勝てるものはいない。

「はい、元気です。先輩、アリシア先輩は？」
「ん、ああ。今日も晩に勉強会だ。試験も近いしな」

アリシア、というのはコーラルの交際相手だ。黒髪の美人で男子の人気も高い。コーラルとは幼なじみだったのだがその近すぎた距離が想いを伝える障害となり、付き合うまでには紆余曲折があった。その告白の際にはヴァイスも一役買っており、今でも二人から強く感謝されている。

「ところで先輩。先輩って魔術で体を強化してるんですよね」
「ああ、そういう体質らしくてな。初歩の魔法とこいつぐらいしか使えないが、威力に関しちゃそこらの魔術に引けをとらんぜ」

実のところ、攻撃用の魔術というのは少ない。攻撃魔術というのは大体が火の属性なのだが、これを扱うには先天的な素質が物を言う。大体二百人に一人いればいい方で、しかも決まってそういう者

達は火の属性の魔術しか扱えない。その点、光弾で攻撃をするイリアやアリスの魔術は本来ありえないものだ。

「しかし、どうしたいきなり。俺の魔術は先天的なものだから、他の奴には使えないぞ？」

「あ、違います。実は、魔術を習ってみようかと……」

その言葉にコーラルだけでなくロビーにいた男子達まで目を剥いた。

「『マジックキャンセラー』が魔術を？」

「無理だろ、どう考えても」

「というか、今頃になってなんで魔術を始めるんだ？」

周りにいた男子達がどよめく。コーラルも気を取り直してヴァイスに向き合った。

「一体何の魔術を使いたいんだ？」

「えーと、秘密です」

周囲のざわめく男子達を見回してヴァイスはそう返事した。あまり人に聞かせたい話ではない。それを察したコーラルも、そうか、とだけ言って真剣だった顔を緩める。

「まあ、とりあえず食堂に行こうか。もうすぐ鐘が鳴るぞ」

「あ、はい。分かりました」

コーラルに付いてヴァイスも食堂に向かう。その途中で鐘が鳴った。時計塔の鐘だ。夕方に鳴るこの鐘は食堂が開く合図にもなっている。

今日のメニューはパンとシチューだった。シチューの中には大きめの肉が転がっている。大抵の場合料理に使われるのは魔獣の肉だ。シチューに使われている乳も魔獣のものだろう。よく人間は上手く魔獣を飼いならせたものだ、とヴァイスは思う。幼い頃、旅をしていた四年の間にヴァイスは魔獣と対峙したことがある。そのときは旅の連れが素手で魔獣を殴り倒していたが、あれは普通の人間には手に余るものだった。

「なあ、ヴァイス」
「なんでしょう、先輩」

コホン、と咳払いをしてコーラルが口を開く。

「何事も根気が一番だ。諦めずに突き進めば何かしら得るものがあるだろう。苦しいとは思うが、俺はお前を応援してる。挫(くじ)けるな。頑張れ」

コーラルの口から出てきたのは叱咤激励の言葉だった。応援してくれるというだけでヴァイスは嬉しくなる。

「はい。絶対に諦めたりしません」

誕生日まであと三ヶ月。時間は充分にある。まずは魔力の挙動を掴む事から始めよう。決意を新たに、ヴァイスはシチューの最後の一さじを口へと運んだ。

それからヴァイスの猛特訓が始まった。
まずは魔術の講義。今までも真面目に授業を受けてきたヴァイス

であったが、実習でも魔術の練習を開始した。結果、周囲の人間の魔術をかき消してしまった。失敗。
次に放課後。学園裏の森の中で一人魔術の練習をしてみた。まずは空を飛ぶときの感覚を分析し、空を飛ばなくても魔力素を吸収できるよう訓練する。おぼろげに感覚は掴めるのだが、気を抜くとすぐに魔力素が霧散してしまう。要訓練。
そして夜。窓から抜け出し空を飛んで大樹の元へ。夜には闇のわだかまる森の中も、光の羽を出していると明るい。宙に浮かびながら魔術を試してみる。結果は失敗。魔力素の吸収量を増やせれば魔術を使える可能性あり。
そんな生活を五日ほどしたところで、学園内に妙な噂が立ち始めた。妖精が学園の空を舞っているという噂だ。
そしてその噂を聞いて目を輝かせるものが一人いた。イリアだ。

「ねえ、ヴァイス。新しい学園七不思議だよっ！」
「えっと、今度はなに？」

講義室ではしゃぐイリアと、その横で興味なさげに座っているアリス。イリアが幾つ目かわからない不思議に夢中になるのはいつものことだが、今日は勝手が違った。

「妖精さんだよ妖精さん！　夜の空を光の羽を生やした妖精が飛んでいたんだって！」

それを聞いてヴァイスは苦笑いをする。

「ごめん。それ多分僕だよ」

声を抑えて二人にだけ聴こえるように言う。それを聞いてイリアが目を丸くする。

「ヴァイスって妖精さんだったの？」
「違う違う。きっと夜に空を飛んでいたのを誰かに見られたんだよ」
「あ、なるほどー」

納得の声を上げるイリア。

「でも練習するだけなら自分の部屋でやっててもいいんじゃない？」
「あ」

迂闊だった。確かに魔力を扱う練習だけなら寮の自室でも出来る。しかもヴァイスがやっているのは一番簡単な魔術、『照明』だ。危険性はまるでない。

「私が喚ぼうか？」
「でも代償は払わされるんでしょ？」
「代償は無しでもいい。貴方の心を占めるものがなんなのか、興味がある」

それはとても魅力的な提案だった。確かにアリスならば召喚に成功するだろう。だが――

「ごめん。それは最後の手段にさせてもらうよ。できれば僕が召喚したい。ううん、僕が召喚しなきゃ駄目なんだ」

いつになく真剣な顔をしてヴァイスは言った。アリスはヴァイスの目を覗き込む。

「貴方、会いたいんだ」
「心を読んだの？」

「感情の色を読んだだけ。……貴方は渇望している」

言われた通りだった。ヴァイスは召喚術を使って会いたい存在がいる。そこでイリアがため息をついた。

「そっかー。妖精さんじゃなかったのかー」

残念そうに口を尖らせるイリア。

「七不思議探検はまた今度ね」

「うん。また新しい七不思議が見つかったら一緒に探検しようね」

そう言って小指を差し出すイリア。ヴァイスはそれに小指を絡めた。昔から伝わる約束の儀式……らしい。

「ヴァイス」

「あれ？　なんだかアリス、怒ってる？」

相変わらず平淡な声だったが、それでもヴァイスにはアリスの声が不機嫌なものに聴こえた。

「教える。貴方が求めて止まないモノのことを」

どうやらアリスは召喚の対象に敵愾心（てきがいしん）を燃やしているようだった。ヴァイスはため息をつくと、そっとアリスの頭を撫でる。

「十六の誕生日になったら会う約束なんだ。それまでは秘密にさせて欲しい。……駄目かな？」

「……わかった。その代わり、召喚の時には立ち合わせてもらう」

「うん。アリスとイリアにも紹介しておきたいしね」

にこやかに言う。アリスはそれで引き下がってくれた。そして頭を撫でる手を引っ込めると、今度はイリアがヴァイスを見つめてきた。

「どうしたの？　イリア」
「お姉ちゃんだけずるい。ボクも撫でて」

そう言って頭を突き出してくるイリア。ヴァイスも口元を緩めてその頭を撫でる。その光景を見て、周囲の人間がざわめき始めた。

「あそこだけ時間がゆっくり進んでるみたいね」
「三人とも可愛らしいしね、和（なご）むー」
「そういえば、ヴァイスがどっちとくっつくかって賭けはどうなったんだ？」
「まだ続いてるぜ。イリアの方にかける人間が多かったな」
「俺は二人と同時に付き合うのに賭けたんだが」
「一番オッズが高いな。何と8倍だ」

ずいぶんと人気者のようだ。ヴァイスは周囲の声を聞いて苦笑する。イリアはそんなヴァイスを不思議そうに見るが、すぐに力の抜けた笑みを浮かべてなでられるままになる。

「うにゃー」

ふやけた声を出すイリア。つむじの辺りをぐりぐりとすると気持ちよさそうにイリアは目を閉じる。

そこで鐘が鳴り響いた。遺跡探索の講師が入ってくる。イリアの頭から手を離すと、ヴァイスは前を向いた。授業の始まりだ。

講師が話すのは旧世界の遺跡について。その話を聞くたびに、ヴ

ァイスはかつての自分を思い出す。入力された情報だけが己の世界で、言われるままに従ってきた人形のような自分。そんな自分に、あの人は自分で判断することを教えてくれた。生きる喜びを教えてくれた。

「旧世界の遺跡は主にカガクという非常に発達した文明を持っており、発掘された機械は全て電気を用いて動くものばかりだった。発掘された物のうち稼動状態であるものは非常に稀で、用途不明の物品が殆ど(ほとん)だ。発掘された文献も風化して読めないものが殆ど(ほとん)だが、ただ一つ判っている事はそれらが判読不能な古代文字で書かれているということだ。主にギルドがこれらを買い取り、分析して新たな技術を生み出そうとしているが、今の所その試みは上手くいっていないのが現状で――」

古代文字。それは英語という言語だ。今の世界ではなぜか主に日本語が公用語となっている。地方ごとに訛(なま)りがあり、中には別の言語に近くなっているものもある。その理由は世界の秘密に関係することだからと教えてもらえなかった。

そしてカガク。発掘された物品は、現在の技術をはるかに上回る。ただ、ヴァイスはカガクに関してはあまり知識を持っていない。ただ一人カガクに精通した人物を知っているが、その人物は放浪中だ。

「今稼動状態にあると思われる遺跡は三つ。悪魔が住まうとされる魔境、黒の森の中心にある白い建造物、『エッグ』。ここから南に見える天高くまでそびえ立つ塔、『中枢塔(アクシスピラー)』。そして空高くに浮かぶ城、『ウインダム』だ。エッグを調べに黒の森に踏み入った冒険屋は全て行方不明。中枢塔(アクシスピラー)は入口がなく、壁の破壊も不可能。ウインダムに至っては、人間の飛べる高さではなく近づくことさえ出来ない」

講師の説明が続く。ヴァイスもウインダムを目指そうとしたことがあるが、失敗に終わった。なんでもあれは人工衛星で、成層圏より高い位置にあるという話だ。たどり着くには宇宙船、またはそれに準ずる物が必要だとか。

過去を振り返りながらも講師の言葉をメモに取る。後ろの席を見てみると、イリアは目を輝かせて講師の説明に聞き入り、アリスは机に突っ伏して寝ている。見事に対照的な姉妹だ。

「――と、今日の話はこれまでだ。次回は森の中の遺跡についてだ。こっちの方が諸君には重要度が高い。試験も厳し目にいくからな。きちんと話を聞くように。以上」

話し終えた講師が教室から退出した。そして教室にざわめきがみちていく。それと同時にアリスが目を覚ました。

「お姉ちゃん。ちゃんと話を聞いていないと駄目だよー」

「興味、ないから」

アリスは気が乗らないと居眠りをしたり、授業を欠席することがままある。そして試験のたびにイリアが勉強会を開くのだ。おかげで成績は悪いながらも一応アリスは試験をクリアしてきた。

「ヴァイス」

「なに？　アリス」

アリスの顔は能面のように変わっていない。それでもアリスはどことなく楽しそうに見えた。

「思いついたことがある。あの場所で試してみよう」

アリスが腕を引っ張ってくる。そのアリスをイリアが抱きかかえて椅子に座らせた。

「駄目だよ、お姉ちゃん。次の授業があるんだから」

「授業ごとき、受けなくても死なない」

「だーめ。それに次の授業は魔術？だよ？　お姉ちゃんも好きでしょ？」

「む……」

イリアの言葉にアリスは抵抗をやめる。魔術と薬に関してはアリスも目の色を変える。魔術の多彩さでいうならばイリアに軍配が上がるのだが、魔法薬、魔道具の製作においてアリスの右に出るものはいない。

「わかった。放課後に行こう」

「うん。いいよ」

アリスの言葉に二つ返事でオーケーする。場所は森の中の大樹の下だろう。アリスが思いついた方法がどんなものかは分からないけど、ヴァイスの体質と魔術の関係について最も理解しているのはアリスだ。期待していいだろう。

そして始まる魔術の講義。講師の言葉をしっかりと聞き、必要な部分をメモしていく。ヴァイスは魔術の実技が壊滅的なため、座学で点を稼いでおかねばならない。

だが魔術自体未だその技術は確立されていない。理論だけではなく感覚に頼ることが多い魔術の理論を理解するのは困難だった。

授業の時間は講師によってまちまちだ。授業の始まりと終わりは時計塔の鐘によって知らされるが、大抵の場合鐘がなる前に講師は講義を終えて退出してしまう。魔術の講師もその例に漏れず、鐘がなる前に講義を終えて教室を出て行ってしまった。残された生徒達

は講義の分からない点を互いに教え合う。

「イリア。教えて欲しいところが有るんだけど」

「ん？　いいよ。どこが分からなかったの？」

「魔術の魔力に乗せた思念と効果の変動性について。どうしてもここが理解できないんだ」

こうして魔術の講義の後イリアに分からない点を教わるのも恒例化してしまっていた。その横でアリスは指先から光を生み出し魔法陣を描く。空中に魔法陣を描くのはかなりの高難度技術だ。

最も魔法陣は、いや、呪文も含めて全ての魔術的行為はイメージを固定するための行為でしかないという。つまるところ、魔術とは魔力に載せた思念によって効果が発動する。イリアとアリスが空中に無言で浮かべるのもそう言った例の一つだ。

「――というわけで同じ魔力を消耗しても、魔力に乗せられた思念の強さによって魔術の効果は増減されるんだよ。ちなみに魔力の質にも個人差があって、人間に魔法が使えないのは悪魔が人間とは異なる質の魔力を持っているからなんだ。分かった？」

「概ねは。ありがとう、イリア」

イリアの解説が終わる。同時にアリスが描いていた複雑に絡み合った立体魔法陣が掻き消えた。

「さ。ヴァイス、お姉ちゃん、ご飯に行こう」

イリアが席から立ち上がる。アリスもその後に続いた。ヴァイスもメモをとった紙を持って教室を出る。同時に授業終了を知らせる鐘が鳴り響いた。今日の授業はこれで終了だ。

学食のある棟は向かい合う二つの寮とコの字を描くように建てら

れている。ここでは五十を超える料理人達が働き、学生達の食事を作っている。ちなみに学生達の授業料は決して高くない。その代わり学生達は卒業後一定期間ギルドの依頼を割り当てられ、その報酬の一部が天引きされてギルドの予算に回されるという仕組みになっている。また、これを拒否すると一定の金額をギルドに納める規則があり、払えない者は地獄の取立人に死ぬまで追い回されるともっぱらの噂だ。

昼食を終えたヴァイス達三人は、張り切るアリスを先頭に森の中を突き進んで大樹の根元までやってきた。

根と根の間の地面に三人が立つ。アリスが地面に手を触れると、途端に地面が小さく隆起して幾何学的な図形を描きあげた。円の中に碁盤目状の四角が描かれた図形だ。

「これって木の精霊の召喚陣？」

ヴァイスの問いにアリスは頷く。他の魔術と違い、召喚陣は描かれた図形によって効果が決定される。召喚術には必ず召喚陣が必要となり、召喚対象の同意を持って召喚という魔術は成立する。このとき召喚対象が送られてきた魔力の質や思念を読み取り、同意するかどうかが決められる。精霊というのは好みが激しく、ごく一部の人間にしか召喚に応じてはくれない。

「ヴァイス。浮いて」

アリスから指示が出される。ヴァイスが体の力を抜くと、ふわりと体が浮き上がった。背には光の羽が輝いている。

「その状態を維持したまま地面に足をつけて」

軽くなった体は音を立てずに地に降り立った。足は地に着いてい

るものの、地面を踏みしめる感触は一切伝わってこない。

「そのまま魔力を召喚陣に注ごうとして」

指示に従い、召喚陣に手を付ける。アリスがなにをやらせようとしているのか、ヴァイスには大体分かってきた。

「そのまま『飛翔（フライト）』を徐々に解除して」

体に徐々に重みが戻り、足が地面を踏みしめる感触が脳に伝えられる。だが背中の羽はそのままだ。そして召喚陣に白い光が走る。『飛翔（フライト）』に使っていた魔力を、徐々に召喚陣に移し替えているのだ。

「召喚（サモン）」

その呟きをトリガーに、召喚陣が一際眩しく光った。思わず目を閉じてしまう。

そしてヴァイスが目を開けたとき、目の前には二十を優に超える数の光球が浮いていた。穏やかな緑色の光。まぎれもなく木の精霊だ。目の前の光景に思わず呆然としてしまう。

「これを……僕が……？」

「す、すごいよヴァイス！　一度にこんなに精霊を召喚できるなんて！」

イリアの言葉にはっとする。召喚術ができた。その事実を噛み締めると同時に口元が緩む。

嬉しかった。どうしようもないくらいに嬉しかった。『飛翔（フライト）』しか使えなかったヴァイスが初めて使えた奇跡。心の奥底で弾けた喜びがヴァイスの全身を支配した。

「ありがとう、アリス」

アリスのほうに向き直ってお礼の言葉を口にする。

「わぷっ」

嬉しさと感謝の念のあまり、ついアリスを抱きしめてしまった。ヴァイスの腹に押し付けられたアリスが変な声を上げる。

初めはもがいていたアリスだったが、しばらくするとアリスもヴァイスの腰に手を回してきた。やがてヴァイスが抱擁を解くと、アリスは押し付けられていたヴァイスの腹から顔を離す。

「ぷはっ」

「あ、ごめんアリス。つい力が入っちゃった」

「……別にいい。貴方の匂いを堪能できたから」

恍惚(こうこつ)の色を目に浮かべたアリスが小さく、本当に小さく微笑む。

「匂いって、そんなにいいもんじゃないよ？」

「貴方は特別だから」

アリスがそっと体を離す。そして次の瞬間イリアが抱きついてきた。慎ましやかな胸がヴァイスの胴に押し付けられる。

「おめでとう！　これで召喚術が使えるね！」

「う、うん。ありがとう」

押し付けられる柔らかな感触に心臓が大きく跳ねる。ヴァイスは平静を装って抱きついてきたイリアを体から離した。

こうしてヴァイスは召喚術を使えるようになった。だが、同時にヴァイスはとある大きな問題を抱えることになってしまったのだった。

？　精霊　　――Ｓｐｉｒｉｔ――（前書き）

没作の続きに手を加えてみました。これ以降はプロットしか残っていないので次話の投稿までかなり時間がかかると思われます。御容赦下さい。

？　精霊　――Ｓｐｉｒｉｔ――

召喚術には一つの問題がある。召喚した対象を送り返す送還術が未だ確立されていないことだ。召喚術の歴史自体は決して浅いものではないが、それでも召喚術を扱える魔術師が圧倒的に少ないのが理由の一端を担っている。

そのため、召喚された対象――主に精霊――は使役された後放置されることになる。精霊の場合勝手に自分達に適した土地に住み着くので問題になることはないはずだった。今回のケースを除いては。

夕方の学食棟はいつも人で賑わいを見せていたが、今日のざわめき方は普通ではなかった。食堂中の生徒達が押し合いへし合いしながら一箇所へと固まっている。その中心はぽっかりと空いていて、そこに一人の白髪の男子がいた。

「凄え……。精霊があんなにいる」
「見る限り二十以上はいるぞ」
「あいつって『マジックキャンセラー』だよな。何で魔術が使えないはずのあいつが……」
「ヴァイス君おどおどしてて可愛いー」
「なあ、それどうしたんだ？」

周りから絶え間なく浴びせられる言葉にヴァイスはあたふたしていた。その周囲には緑色の光球がふわふわと漂っている。木の精霊達だ。

ヴァイスがどうしようもなくおろおろしていると、群集をかき分け一人の男子がヴァイスの前に来た。コーラルだ。

「……どうしたんだ？　それ」
「コーラル先輩！　実は――」
そしてヴァイスは話し出す。今日の昼過ぎに起こったことを。

◇

ヴァイスに抱きついていたイリアが身を離した直後のことだった。召喚陣の上に漂っていた精霊達がヴァイスに纏（まと）わり付いてきた。
「イリア。これは？」
「えーと、ヴァイスの魔力を吸ってるんだと思うよ。ほら、精霊は魔力を吸って、そこに込められた指示に従って力を使うでしょ？ヴァイスは普段から魔力を垂れ流しにしているから、それ目当てでくっついてきてるんだよ、きっと」
イリアの説明に納得する。精霊にとって魔力は必須のものではないが嗜好品の様なものだ。虫が蜜にたかるようにヴァイスに集まっているのだろう。
「召喚した精霊ってどうすればいいんだっけ？」
「魔力の供給を切れば後は勝手に何処かへ行っちゃうよ」
ヴァイスの背にはもう光の羽はない。つまりここにいる精霊はヴァイスの普段周囲に張り巡らされた魔力――魔力素を世界の裏側に押し戻す力を吸収しているということになる。

「……どうやれば魔力を消せるんだろう」

無意識に放出していた魔力を消す方法が思いつかない。このままではずっと精霊達に纏(まと)わりつかれることになる。

「無意識に放出される魔力は薄い。精霊は意図的に魔力を供給しないとすぐに何処かへ行ってしまう。……本来なら」

「アリス？」

「貴方は特別。無意識に放出している魔力がひどく濃い上に魔力の質が違いすぎる」

アリスが平淡な声で説明してくれる。だがよくわからない部分もある。

「ねえ。魔力の質が違うってどういうこと？」

「魔力を色で表すならば、私達の魔力は万色(ばんしょく)たる黒。たまに偏(かたよ)って緑とか赤になる者もいるけれど、貴方のような色にはならない。あなたの色は、決して黒からは生まれでない白。その魔力は、黒に属するものにとっては最高の嗜好品となる。それは緑の色である精霊も同じ」

つまり、ヴァイスの魔力は精霊達にとってこの上ない餌(えさ)ということらしい。

「分かった。それで精霊達を野に返すにはどうしたらいいの？」

「魔力の供給を断つしかない」

無意識の魔力の放出を止める。どうすればそれができるのか、ヴァイスにはさっぱり分からなかった。

「どうしよう。このままだとずっと付いて来ちゃうよね」
常に精霊に付きまとわれる。それはひどく面倒な事態を呼びそうだった。
「とりあえず、ボクの部屋に行こうよ」
そう言ってイリアが宙に浮く。その後に続こうとヴァイスは背中に光の羽を展開――できなかった。
「あれ？」
「どうしたの？　ヴァイス」
何度か試してみるけれど宙に浮くことが出来ない。アリスが近寄ってきてヴァイスの背中をぺたぺたと触(さわ)る。
「魔力素を吸収するための魔力も精霊に吸収されてる。これじゃ魔術は使えない」
「そ、そんな……」
このままでは魔術は一切使えない。三ヶ月後の誕生日の召喚も諦めなければならなくなる。
「とりあえず、歩いて帰ろっか」
そう言ってイリアが地面に降りてくる。
それから森を歩いて寮まで帰り、女子寮のイリアの部屋に通された。
白い壁に小さな花の絵が飾られている。棚にも魔導書などと一緒

にぬいぐるみなどが飾られており、パステルカラーの敷物が可愛らしい女の子の部屋だと感じさせてくれる。アリスの部屋とは大違いだ。なぜ姉妹であるのにこうも違うのだろう。

「それで、どうする？」

部屋の真ん中にある丸いテーブルを囲んで話し合う。

「私が全部殺そうか？」

「駄目だよアリス。この子達はただ喚ばれて来ただけなんだから」

物騒なことを言うアリスに釘を刺す。アリスはやや不機嫌な顔でヴァイスの周囲を漂う精霊を見つめていた。

「じゃあヴァイスが魔力を抑えるしかないけど……」

「ごめん。どうやったらいいのか分からない」

イリアと共にため息をつく。

「一時的に魔力を抑える魔法薬を作ろうか？」

そうアリスが提案する。なるほど、無理矢理魔力を出せなくするわけだ。

「お願いしていい？」

「分かった。ただし、貴方にも手伝ってもらう」

「薬を作るのを？」

「貴方には別の薬を作る手伝いをしてもらう。等価交換。これだけ濃密な木の属性のマナなら充分出来る」

何が出来るのかは深くは聞かない。アリスの部屋の棚には蛍光ピンクやオレンジ色に発光する薬など、見るからに毒々しい薬があった。どうせろくな薬では無いだろう。だが、今はアリスだけが頼りだった。

「分かった、お願いするよ」

「あ、お姉ちゃん。ボクも手伝うよ」

◇

「――というわけで、今アリス達に薬を作る準備をしてもらっているところです」

「そうか。……しかし凄いなこの数は。噂に聞く『アンデッド』のようになれるんじゃないか？」

コーラルがとんでもないことを口にする。『アンデッド』とはある冒険屋の異名だ。体内に十八もの木の精霊を宿したその冒険屋はどんな傷を負っても瞬時に再生するという。またその再生力の副次作用で凄まじい膂力（りょりょく）を発揮するらしい。

「でもこのまま魔術を使えないのは困りますよ。早いところこの子達にはお引取り願わないと……」

「まあ、とりあえず飯を食って元気を出せ。おい！　通らせてやってくれ！」

コーラルの言葉に従ってヴァイスを取り巻く集団の一部が割れる。

その狭い隙間をコーラルに引っ張られてなんとか抜け出すことが出来た。
コーラルとヴァイスを先頭に、配膳口に長蛇の列が出来る。基本的に学食はセルフサービスだ。コーラルに連れられるまま食堂の片隅に座るヴァイス。ヴァイスの前にはコーラルと艶のある黒髪の女子が座っていた。

「あ、アリシア先輩。こんばんは」
「こんばんは、ヴァイス君。大変そうね」

おっとりとした口調で話しかけてくるアリシア。ヴァイスの周囲の精霊を見てもあまり驚いた様子はない。

「驚かないんですね」
「驚いていますよ。すごいなーって」

にこやかに話すアリシアに動じた様子は見られない。アリシアがこのマイペースを崩すことがあるとしたら、それはどれほどの大異変なのだろうか。
魔術師を中心とした一団が取り巻く中で食事を始める。中にはコーラルとアリシアが互いに食べさせあう様子を見て悔し泣きや恨みがましい目をする者もいた。だが二人だけの世界に入っているコーラルとアリシアはそんな周囲を気にも留めず、惚気話を始めている。

「ところでヴァイス。お前、イリアとアリス、どっちが好きなんだ？」

一通り二人の夫婦的会話が終わったところで、コーラルはそんなことを口にした。

「うーん。どっちも大好きですよ。あ、コーラル先輩とアリシア先輩のことも大好きです」
「そういう意味じゃなくってだな。恋する方の好きって意味だ」
呆れた返った様子のコーラルにヴァイスは苦笑してしまう。それは度々（たびたび）いろんな人に聞かれたことだった。
「うーん。そういうのって分からないんですよ。アリスのことは好きだしイリアのことも好きだけど、それが友愛なのか恋愛なのかよく分からないんです」
「そうか……。ならどちらを抱きたいと思う？」
コーラルの言葉に思わず噴（ふ）き出しそうになる。ヴァイスの心臓が早鐘を打ち始めた。
「何をいきなり言うんですか！？」
「何って、だからどっちにエッチなことをしたいかと聞いているんだが」
コーラルの言葉に赤面するヴァイス。顔が熱くなって何も言えず縮こまってしまう。そして脳裏に蘇るのは抱きしめたアリスのひたすら柔らかい体と、抱きついてきた時に当てられたイリアの慎ましやかな胸の感触。
「そ、そんなこと考えたら二人に失礼ですよっ！　僕はそんなことなんて……考えた、こと……」
「あー、そうか。悪い。忘れてくれ」
コーラルの大きな手がヴァイスの頭に乗せられた。その大きな手で頭をなでられて頭に上っていた熱が段々収まってくる。コーラル

に頭をなでられる様子を見てアリシアが微笑んだ。こんな会話にも動じていないのは実に彼女らしい。
夕食をなんとか食べ終えると学食を出て、アリシアと別れて男子寮に入る。これから風呂の時間だ。コーラルと二人着替えと洗面用具を持って共同浴場へと向かう。その途中でコーラルが質問をぶつけてくる。

「なあ、ヴァイス」
「何でしょう？」
「もしあの二人のどちらかから告白されたとしたら、お前はどうする？」
「それは……」

ありえない、とは言い切れない。イリアはまだまだ精神年齢は幼いが、抱きついてくるなど率直な愛情表現をしてくる。アリスも告白とも取れなくもない言葉を口にすることも多々あるし、ヴァイスを見る目が熱っぽく感じたこともある。もし、どちらかから告白されたとしたら――

「分かりません。とりあえず考えてみます。本当に僕がその子を好きなのかどうか」
「そうか。いや、お前今まで女子に告白されても全部断ってきただろ？　だから二人のどちらかに心を決めているのかと思ってな」

意地の悪い質問だった、とコーラルが謝ってくる。それにヴァイスは苦笑で返す。

「とりあえず、今の僕には色恋の話なんてもっと先でいいです。それより今はこの子達をなんとかしなくちゃいけないですし」

ヴァイスの周りを飛び回る精霊達。脱衣所で服を脱ぐと、肌に触れるようにくっついてきた。

「はは、人気者だな」

「うー。森に帰ってくれないかな……」

体を洗ってから浴槽に浸かる。湯の温かみが今日一日の疲れを癒してくれるようだった。

「しかし髪を下ろすとますます女の子っぽく見えるな」

「僕はれっきとした男ですよぅ」

髪を止めていたゴムを外しているので白髪が肩の辺りまで降りてきている。ヴァイスの髪を切るのはいつもイリアがやってくれている。そのため可愛らしく見えるようにカットをされるのだ。ちなみにアリスの髪もイリアがカットしている。イリア自身は学園を出た通りにある理髪店でカットを頼んでいるらしい。

「短くして逆立てたら男らしく見えますか？」

「似合わんからやめておけ。それに今のが一番似合ってるんだからいいじゃないか」

「中等部のとき男子に告白されたことがあるんですけどね……」

中等部二年生の時のある日、校舎裏に呼び出された。喧嘩（けんか）かと思いヴァイスの数少ない持ち物の一つ、幅のある一メートルを超える白い大剣を背に校舎裏に行ってみると、いきなり付き合ってくれと告白されたのだ。無論断ったがしつこく言い寄られたため、仕方なくヴァイスは実力行使に出た。それ以降も散々言い寄られ、最終的にアリスによってその男は処理されることとなったのである。今ではその男子はヴァイスの半径五メートル以内に近づくことはなくな

ったが、ヴァイスの心には深い傷が残ることとなった。

「そうか。すまんかった。嫌な事を思い出させたみたいだな」

体を震えさせるヴァイスにコーラルが謝ってきた。頭(かぶり)を振って嫌な思い出を思考の外に追い出すヴァイス。

「じゃあそろそろ上がりましょうか」

「だな。これ以上浸かっていると茹(ゆ)だっちまう」

風呂から上がり、体を拭いて服を着る。そして服の下で体に張り付いている精霊を引っぺがし服の外に出す。それでも精霊達は頭や腕など肌の露出している部分にくっついてきた。どうやら直(じか)にくっついているのが気に入ったらしい。

湿った髪を手櫛(てぐし)で軽く整え、部屋の前でコーラルと別れる。部屋に入るなり靴を脱いでベッドに横たわった。

「今日は疲れたな……」

今日一日を思い返す。目の前を漂う精霊達を見て、自分が召喚術を行使したことを改めて実感する。

ふと体を起こし、机の奥にしまってある古びた紙を取り出した。そこには絵が描かれている。幾何学的なものではないがこれも召喚陣の一種だった。

「あと三ヶ月で約束の十六歳、か……」

天井を見上げて呟く。思考は過去へと飛び、旅をしていた四年間を追憶する。

「楽しみだな……」

きっと今も変わらぬ姿で旅をしているであろう人を想い、思わず顔に笑みが浮かんでしまう。苦しかったけど、とても意義があった旅。あの頃のように、イリアとアリスの二人と一緒に三人で旅をしたい。それが、ヴァイスの抱く夢だった。

そして授業のメモを机の上に放り出したままいつもより早く眠りにつく。その夜に見た夢は、懐かしい旅の記憶だった。

翌日の授業は実戦訓練だった。皆が刃をつぶした剣や捧、杖を倉庫から取り出す中、ヴァイスは一人倉庫から離れたところに立っている。

「どうしたヴァイス。授業を受けないのか」

「今日は見学にさせてもらいます。この子達が邪魔をして離れないので」

声をかけてきた講師に自分の周りを飛び回る緑の光球を指差して返事をする。

「それは分かったが、扱いは欠席にしておくからな」

危ないから見学します、などという理由では欠席扱いにされても仕方がない。大人しく皆が剣や棒を取り回すのを眺めることにする。

やがて様々な相手と組んでの模擬戦闘が始まった。ただ二人、イリアとアリスが皆の枠組みから離れるように立っていた。

二人の魔術の威力が強すぎて、相手を出来る人間がいないのだ。

二人の周囲に光弾が生まれ、ぶつかり合う。そのうち体を使って

光弾を避けながら光弾を撃ったり、複数の光弾を防壁を作り出して防いだりと模擬戦は実戦の様相を呈してきた。いつものことなので誰も気にしない。段々と戦いが白熱する中、遂にアリスの光弾の一つがイリアに当たった。イリアは軽くよろめく。そして二人は周囲に纏(まと)っていた光弾を消した。

「あーあ、また負けちゃった……」

「勝利」

基本的に訓練ではアリスの方がイリアより強い。イリアが勝利するのは稀(まれ)だ。尤も二人ともかなりの手加減をしているので、本気の実力がどの程度か分からないのだが。

他の面々も激しい音を立てて剣や棒をぶつけ合っている。肉弾戦をメインに戦う者達にとっては威力を最優先にするのが基本だ。なぜなら冒険屋が戦う相手は人間ではなく魔獣なのだから。まあ、犯罪者などを相手取ることもままあるが。

そしてそのような威力に武器が破壊されてしまうことも良くある。強すぎる力に金属性の剣や捧はどれもこれも歪んでいる。使用者の力に武器が耐え切れないのだ。

そんな武器を持って戦う者達の動きを改めてヴァイスは観察する。足運び、体捌(たいさば)き、そして剣筋。

やがて授業が終わり、皆は倉庫に武器を戻しにいく。そんな中、武器を使っていなかったイリアとアリスがヴァイスの元にやってきた。

「ヴァイス。一緒にご飯食べに行こう」

「うん。行こうか」

三人で学食棟に向かい、テーブルに向かい会わせに座る。昼食の最中、ヴァイスは気になったことをアリスに質問してみた。

「昨日薬を作るのを手伝うように言ってたよね。どうやって精霊に指示すればいいの？」
「貴方の思念を魔力に乗せれば精霊達は指示通りに動く。精霊は知性は低いから簡単なことしか出来ないけど、そのポテンシャルは高い。貴方には木の属性のマナを薬に注ぎこんでもらう」

アリスの説明を聞いて、ヴァイスは右手を胸の前で開いた。
――集(つど)え。
ヴァイスの意志に従うように、精霊達がヴァイスの手の上に集(つど)う。思ったより精霊を指揮するのは簡単だった。

「下準備は済ませてあるから、後は薬にマナを注ぎこむだけ」
「ちなみに魔力を抑える薬は？」
「あと十日はかかる」

十日。まあその間くらいは大丈夫だろう。せいぜい戦技実習に出られないくらいのものだ。

「そういえばヴァイス、今日は戦技の授業参加してなかったね。どうしたの？」
「今は魔術をかき消す能力(チカラ)が使えないから、いつもの調子で行くと危ないと思ったんだ」

ヴァイスの能力(チカラ)は単に魔術をかき消すだけではない。人間の高い身体能力は魔力によって支えられていることが証明されている。だからヴァイスに接近した相手は一時的に身体能力が低下してしまう。ヴァイスが学園で有名になったのもそこに理由があった。
だが今は逆にヴァイスの魔力が精霊に吸われている。どうにか身体能力は維持出来ているみたいだが、いつそのバランスが崩れるか

分からない。
昼食を終え、女子寮のアリスの部屋に入る。異様な雰囲気は相変わらずだが、中央のテーブルの上には怪しい薬品のセットが積まれていた。アリスが灯(とも)した魔術の光に照らし出されたのは、幾つもの液体が入った試験管と、透明な液体の入ったフラスコ。

「あ、ヴァイス。ヴァイスはそのフラスコの薬の担当だよ」

明るい口調でイリアが言う。テーブルに近付いてフラスコを揺らしてみる。ちゃぷん、と音がした。ただの水のように思えるが、これは未完成の魔法薬だ。相当に危険な物の可能性がある。

「試験管の薬液は反応が終わるまであと四時間かかる。その薬は木のマナを加えれば完成。さあ、やってみて」

フラスコの栓を開けて差し出すアリス。それを受け取ると、ヴァイスは周りの精霊に念じてみた。
――ここにマナを集中。
フラスコの周りに木の精霊が集まり、フラスコの中に緑色の光を注ぎ込む。なぜかその中の液体はピンクに染まっていった。

「いけない。勢いが強すぎる」
「え？」

アリスの呟きにヴァイスが声を上げた瞬間、ボフッとフラスコからピンクの蒸気が飛び出した。開いた口の中に液体の飛沫(ひまつ)が飛び込む。えもいわれぬ味にヴァイスは顔をしかめた。周りを見ると、アリスとイリアは光を放っている。魔法で防御したようだ。

「なあ、アリス。これ、何の魔法薬……！」

その言葉は最後まで続けられなかった。ヴァイスの体の中が燃える様に熱くなる。震える手でフラスコをアリスに手渡すと、ヴァイスはその場に倒れこんでしまった。イリアが自分の名を呼ぶ声を聞きながら、ヴァイスの意識は闇へと落ちていった。

暗い海の中で明るい水面を見つめている。体は思うように動かず、苦しいのに上に上がる事が出来ない。このまま死ぬのかと思ったとき、体が急に軽くなった。そのまま体は水面へと上っていき――そこで、夢から覚める。

後頭部に柔らかな感触がある。目を開くと、逆さまになったアリスの顔があった。どうやらヴァイスはアリスに膝枕をされているらしかった。

「アリス。僕はどれくらい眠っていたの？」

「半刻ほど」

思ったより意識を失っていた時間は長くはなかったらしい。ただ、妙に自分の声が高い気がする。体を起こそうとすると、額に手を添えられた。起きるな、ということらしい。

「ヴァイス、あのね、落ち着いて聞いて欲しいんだ」

イリアが気まずそうな顔をして顔を覗き込む。そしてヴァイスの胸に手が当てられた。

――むにょん

ひどく柔かいものが胸にあった。視線を自分の胸に移す。そこにはシャツを大きく持ち上げる二つのふくらみがあった。
自分でさわってみる。柔かい。さらに揉(も)んでみる。深く指が沈みこむ。
さらに股間がスースーする。そこにあるべき重みが感じ取れない。
「あのね、ヴァイスはあの薬の効果で女の子になっちゃったの」
イリアの言葉が空っぽの頭に反響する。数秒おいて、やっとヴァイスはイリアの言葉を理解した。
「え、えええええ!?」
勢いよく立ち上がる。胸が重い。さらに股間に手を当てると、そこにあるべきモノがない。
「座って。説明するから」
言いたい事は色々あったが、自分を抑えてアリスの指示に従う。頭の中はごちゃごちゃとしてまとまらないが、とりあえずアリスの説明を聞いてみることにした。
「あのフラスコの薬は、反対の性別に擬態させる魔法薬。それを貴方は微量ながら口にしてしまった。本来ならばその程度ではこの薬の効果は発揮されない。でも、貴方の周りには二十を超える木の精霊がいる。そのマナが薬の効果を増幅させ、貴方の体を女のものにしてしまった」
「……元に戻る方法は?」

「本来ならば飲んだ量に比例した効果時間が存在する。つまり時間の経過で自動的に元の姿に戻る。だけど貴方の場合、常に精霊が薬の効力を増幅し続ける。その精霊達がいなくならない限り貴方はその姿のままということになる」

混乱する。いや、精霊が消えれば元の姿に戻れるのは分かった。でもそのための薬は十日後にならないと完成しないわけで、それまでの間どうやって暮らせばいいのか。特に問題になるのは風呂だ。男子達に襲いかかられたら今のヴァイスに撃退できる力は無い。いや、そもそも授業とかはどうすればいいのだろうか。

「とりあえず、寮監と先生達に相談しようよ。どうにかしてくれるかも」

イリアの提案にとりあえず頷く。まずは現状を知ってもらって、対策を練ってもらうのだ。

そう決めたら動きは早かった。まずは男子寮と女子寮の寮監、そして学年主任の教師を呼んで、一通りの説明をする。

「必ず十日後には何とかできるんだね？」

「はい。必ず」

学年主任の質問に迷い無く答えるアリス。その言葉が今は頼もしい。

「ならばそれまでの生活はどうする？　男子寮で女子が暮らすとなると、不都合も多いだろう」

男子寮の寮監がそう言った。確かに男子寮は危険だ。女子寮に覗きを敢行（かんこう）して女子寮の寮監に折檻（せっかん）されたにも関わらず、未だに懲り

ていない連中がいる。しかも上級生だ。今のヴァイスは格好の獲物となるだろう。

「あら。なら女子寮に住めばいいんじゃないでしょうか」

そして女子寮の寮監の言葉に呆気に取られた。寛容な事で知られる美人の女性なのだが、不埒な行いをする者に対しては羅刹（らせつ）と化す。

「あの、僕は中身は男なんですけど……」

「でも体は女の子でしょう？」

「お風呂とかどうするんですか？　流石に他の女子と一緒に入るのはまずいのでは」

「大丈夫。時間を区切って一人で入れるようにしてあげるから」

なるほど。そうやって便宜を図（はか）ってくれるのなら女子寮で暮らしてもいい気がしてきた。

「じゃあヴァイス。ボクの部屋で一緒に暮らそうよ」

「あら、イリアちゃんいいの？」

「もちろんです！」

まずい。寮監とイリアの間でまずいことが進められていく。しかも男子寮の寮監と学年主任は黙って事の推移を見守っている。

「イリア。一応僕も男なんだから、一緒に住むのは問題があるよ」

「ヴァイス？　問題って？」

「そ、それは……」

どもってしまうヴァイス。イリアは純粋な好意でヴァイスを受け入れようとしてくれている。ここは素直に好意に甘えておくべきだ

ろう。ヴァイスが何も問題を起こさなければ済むだけの話だ。まかり間違っても愛の結晶が生まれることはありえないし。

「分かった。お願いするね、イリア」

「わーい。やったー！」

ヴァイスの返事に無邪気に喜ぶイリア。後はヴァイスが何も問題となる行為をしなければいいだけだ。

「じゃあヴァイスの部屋に行こう」

「僕の部屋？　どうして？」

「だって服とかの荷物を運ばなきゃいけないんだよ？　手伝った方がいいに決まってるよ」

なるほど。イリアのいうとおりだ。勉強の道具に本、着替え。一人では一度に運べない。

「私も手伝う」

アリスもそう申し出てくれた。三人で運べば一度で済む。

「ありがとう。お願いするね」

細かいことは先生にお願いして男子寮に三人で入った。部屋にたどり着いたところで隣の扉が開き、コーラルが出てくる。

「こんにちは、コーラル先輩」

「ああ。えっと……ヴァイスか？」

「はい、そうです」

証拠に木の精霊達を前に集めて見せる。

「……なんで女になってるんだ？」

「アリスの魔法薬でこうなってしまいまして……。十日間はこのままだそうです」

「そ、そうなのか。それはご愁傷様だったな」

同情してくれた。相変わらずいい人だ、本当に。

「それでどうするんだ？　風呂とか大変じゃないか？」

「あー、それが……」

「ボクの部屋で暮らすことになったんだよ！」

嬉しそうにイリアが宣言する。その言葉を聞いてコーラルがヴァイスの頭に手をぽんと置く。

「あー……。まあ、頑張れ」

「……はい」

心底同情された。これからの苦労を慮(おもんぱか)ってくれたその言葉に素直に感謝する。そのままコーラルは何処かへと行ってしまった。ヴァイスは自室の扉を開けてイリアとアリスを迎え入れる。

「アリスはこの勉強用具をおねがい。イリアはこの服を運んで。僕はこの本と服を運ぶから」

二人に荷物を渡し、部屋を出る。扉を閉める際に、部屋の片隅に置かれた大剣を見た。白磁のように白い剣。それから視線を切って、部屋を後にした。

そしてイリアの部屋に荷物を運び込んで一服する。水を飲み、一

息ついたところでベッドに腰掛けるイリアを見て、あることに思い至った。

「あ、寝る場所をどうしようか」

毛布か何か寮監に言って借りてくればいいか。そのヴァイスの考えを、イリアがぶち壊した。

「一緒に寝ればいいんだよ！」

元気いっぱいなイリアの返事に一瞬くらっとする。流石に年頃の男女が同衾（どうきん）するわけにはいかない。

「いや、僕は寮監に相談して毛布か何か借りて床に寝るよ」

「えー。昔みたいに一緒に寝ようよ」

「流石にこの年で一緒に寝るわけには行かないよ」

確かに初等部にいた頃、ヴァイスはイリアとアリスに両脇を囲まれて一緒に寝ていた。だが流石にこの年になって一緒に寝るというのは気恥ずかしくてしょうがない。

「とにかく、寮監に相談してくるからっ！」

これ以上なし崩しにされる前に寮監室に向かう。話はすぐについた。寒い季節ではないので、毛布一枚を借りてイリアの部屋に戻る。扉を開けると、イリアとアリスがヴァイスのパンツを広げて眺めていた。

「ちょ、ちょっとなにやってるの！」

「あ、お帰りー」

暢気な声でヴァイスを迎えるイリア。その手からパンツを取り上げて服と服の間に隠す。

「えへへ。男の子ってああいうの穿(は)くんだね」

「お願い。恥ずかしいから勝手に見ないで」

顔から火が出そうだった。無邪気な分、性質(たち)が悪い。

「ヴァイス、動揺しすぎ。そんなに動揺していると……」

背筋を寒気が走る。一足飛びで部屋の端まで跳び、アリスから距離をとる。

「……残念」

「何しようとしたの？　アリス」

「心を読もうとした。失敗したけど」

忘れていた。アリスの前では無様な姿を見せると容赦なく付け込まれる。それでいて弱っている時には優しくしてくれるのだから、つくづくアリスは不思議な存在だ。

「ところでヴァイス。あのね、お願いがあるんだけど……」

「なに？　イリア」

「胸、さわらせて？」

どうやらこの胸の重りに興味があるらしい。いや、ヴァイス自身も興味がないわけではないのだが。

「……いいよ、そのぐらいなら」

「わーい。ありがとー」

イリアが近付いていて胸にさわる。そのまま揉(も)んだり、掬(すく)い上げるようにして重さを確かめたりされた。

「ねえ、お姉ちゃん。胸が大きくなる魔法薬って無いの？」
「作れないこともない。ただし、一時的な効果しかない」
「そっかー。……いいなー、ヴァイスは。こんなに胸が大きくって」

恨みがましい目で見られる。決してヴァイスは望んで巨乳になったわけではないのだが。

それからは夕方の鐘が鳴るまで、三人でたわいのない話をして過ごした。

そして、学食棟に入ったとき、それは起こった。学生――主に男子がヴァイスの周りに集まってきたのだ。

「おい、本当にヴァイスなのか？」
「あの精霊、間違いないよ。ヴァイスだ」
「本当に女の子になってるよ、オイ」
「胸でかいな。なあ、ちょっとでいいからさわらせてくれよ」

好奇の視線にさらされるヴァイス。その体にさわろうとした不埒(ふらち)な輩もいたが、アリスに触れられた瞬間そういった男達は床でのた打ち回る羽目になった。

そういった男子の間を潜(くぐ)り抜けて、今度は女子達が近付いてくる。

「わー。ヴァイス君本当に女の子になったんだ」
「可愛いねー。男の子の時でも可愛かったけど、ますます可愛くなったよー」
「ねえ、おねーさんと一緒にお風呂に入ろ？」

「む……負けた」

男子以上に遠慮なくぺたぺたと体のあちこちをさわってくる女子達。流石に女子達からはアリスは助けてくれなかった。

散々女子達の玩具（おもちゃ）にされた後、ようやく配膳口までたどり着くことが出来た。空いている席を探すと、コーラルが手を振っているのを見つけた。

周囲の視線を集めながらイリア達と一緒にコーラルの元に行く。コーラルは眉を八の字にしながら笑っていて、その隣に座るアリシアが微笑んで迎えてくれた。コーラル達の向かいの席にトレイをおいて座る。

「あら、本当に女の子になってしまったんですね」

「……あまり驚いていませんね」

「コーラルから聞いていましたから。聞いた時には本当に驚いたんですよ？」

ヴァイスには、アリシアが動じている場面が想像できなかった。ヴァイスが女になったとコーラルから聞いた時も、あらあらうふふと笑って受け入れたのではなかろうか。

「でも、ホントに大きなお胸ですね」

いえ、貴方も立派なものをお持ちですよ、と心の中で呟く。

「重いし重心狂うし勘弁して欲しいんですけどね」

「うー、それは持たざる者への嫌味なんだよー」

拗ねた声でイリアが呟く。アリスは我関せずといった調子で既に食べ始めていた。

「同じ女子寮ということですし、何かお困りになりましたら相談に来てくださいね」

その気遣いの言葉を聞いたヴァイスにはアリシアが女神に見えた。

「お、そういえばこの学園が建てられる前に、ここには遺跡があったって知ってるか？」

「遺跡！？」

コーラルの発した遺跡という言葉に目を輝かせるイリア。七不思議や遺跡という言葉にイリアはひどく弱い。

とりあえず食事を始めようとして気づいた。スープの野菜が明らかに増えている。

「アリス。嫌いな野菜を僕のスープに入れるのはやめようよ」

「……知らない」

平淡な口調で白（しら）を切るアリス。仕方なくヴァイスは野菜増量のスープにさじを入れた。

遠巻きに見物する生徒の視線に耐え、食事をなんとか終えたヴァイスは学食棟を出てコーラルと別れ、女子寮に向かった。

ロビーにいた女子達にひとしきりいじられた後、なんとかイリアの部屋にたどり着いた。扉を開けて中に入り、毛布の上に転がる。

「疲れたー」

大きく息をつく。思えば長い一日だった。だが、後は女子の入浴時間が終わってから一人で風呂に入れば全て終わる。明日以降も男女問わずいじられるだろうが、それは慣れていくしかない。

「ヴァイス、お風呂は？」

「九時の鐘がなった後だって聞いたよ。イリアとアリスは今から入りに行ってきたら？」

「うーん。……よし。ヴァイス、一緒に入ろう」

にこやかにとんでもないことをイリアが言い出した。

「駄目。女の子がそんなはしたない真似しちゃ駄目だよ。ほら、アリスと一緒に入っておいで」

「……分かった。行こう、お姉ちゃん」

棚の下の引き出しを空けて、寝巻と下着を取り出すイリア。そしてイリアはアリスの手を引いて部屋を出て行ってしまった。

「……妙に素直に言うことを聞いたな」

いつもならごねるか無理矢理ヴァイスを風呂に連れて行くかするのだが。不審に思いながらもとりあえずため息をついて不安を余所にやる。

やがて黄色の上下の寝巻を来たイリアが部屋に戻ってくる。

「あれ？　アリスは？」

「お姉ちゃんなら部屋で薬の調合をやってるよ」

薬、というと魔力抑制の薬だろうか。後九日をなんとか乗り切れば、精霊もいなくなってヴァイスは元の体に戻ることが出来る。

「ところでヴァイス。今日コーラルが言ってた遺跡の話なんだけどね」
「この学園が遺跡の上に建てられたって話？」
「うん。来月は一月丸々休みで皆帰省するでしょ？　でもボク達は休み中もここに残るじゃない」
「それで、休みの間に遺跡探しをしてみたいの？」

その言葉にコクリと頷くイリア。まあ、毎年この休みにはイリアに引っ張りまわされるので別に嫌ではない。

「いいよ。遺跡探し、やってみよう」
「やったー！」

そして抱きついてくるイリア。その顔がヴァイスの胸に埋まる。

「いいなあ。こんなに大きくて」
「男の僕には要らないよ。……邪魔だし」

本心からそう言った。いや、イリアと一緒に暮らせることは気恥ずかしいけど少しばかり嬉しいのだが。
そこまで考えて、昨日のコーラルの言葉が脳裏をよぎる。

『どちらを抱きたいと思う？』

心臓が大きく鼓動を打った。耳元から血管が脈打つ音が聞こえてくる。まずい。このままではイリアを『そういう目』で見てしまう。

「ねえ、ヴァイス」
「な、なに？」

声をかけられて思わずどもってしまう。変に思われなかっただろうか。だがイリアはそれを気にした様子もなくにこやかに話しかけてくる。

「学園を卒業したら、一緒に冒険屋をやらない？」

それは、ヴァイスも自身の未来として想像していたことだった。だが今まできちんとそれを約束したことはない。

「うん、いいよ」

ヴァイスが小指を差し出す。それにイリアが小指を絡ませる。先ほどまで動揺していたのに、不思議と心が落ち着いていた。

「イリア。冒険屋になったら、何をしたい？」

「遺跡探しも楽しそうだけど……まずは色んな町を旅してみたいかな。ここには外の世界を知るための勉強をしに来たから」

外の世界。イリア達はどこか閉鎖的な環境で育ってきたのだろうか。ヴァイスが六年前初等部に編入した時、同じタイミングでイリア達も編入してきた。それ以来ずっと二人と一緒にいるが、それ以前の話はまるで教えて貰(もら)えない。

「ねえヴァイス。また旅の話を聞かせてもらっていい？」

「いいよ。どんな話が聞きたい？」

上目遣いにおねだりしてくるイリアにヴァイスは考えるのを止めて答える。考えていても仕方が無い。今は駄目でもいつかは必ず教えてくれるだろう。

「えっと――」

それからヴァイスの思い出話が始まった。それに熱が入ってきたところで九時を告げる鐘が鳴る。風呂の終了時間だ。

「ヴァイス。もうお風呂に行く？」
「まだ人がいるかもしれないから、もう少し時間をずらして入るよ」
「じゃあ話の続きを聞かせて？」

イリアのおねだりに頷いて旅の話を続けた。話し終えると、服とタオルを持って部屋の入口に行く。

「じゃあ、お風呂に入ってくるね」
「うん、分かった」

部屋を出て共同浴場へと向かう。
この時、話していた旅の思い出に浸っていたため気付けなかった。浴場に向かおうとしているヴァイスを、イリアがわくわくした表情で見守っていたことを。

浴場の脱衣所に入り、シャツを脱ぐ。胸が服の下からこぼれ出た。まじまじと見つめる。とても大きい。
黒いズボンと下着を脱いで、髪を纏めているゴムを外す。周りにいた精霊が肌に張り付いてくる。そしてタオルを持つと脱衣所にある大きな姿見（すがたみ）の前に立った。

「これが……僕……？」

張りのいい大きな乳房を持ち上げながら、姿見(すがたみ)に映る自分の姿を見て赤面する。やがて胸を見つめる視線はだんだん下に移っていった。

――どうなっているのかな。

そう思った瞬間、脱衣所の扉が開く音がした。瞬間的にそこから飛びのき浴場へと入る。

――僕はなんてことを考えていたんだ……。

顔が熱い。もしあの場を見られていたらと思うとぞっとする。しかし、一体誰が脱衣所に入ってきたのだろうか。

「まあ、普通に考えて忘れ物をした人だよね」

桶にお湯を汲み、タオルを浸す。石鹸を取ったところで浴場の扉が開いた。そこには裸体を隠すことなくタオルを持って立っているイリアとアリスがいた。

二人の姿から目が離せない。イリアは笑顔で、アリスは珍しく微笑を浮かべてヴァイスの元へと近付いてくる。

「ふ、二人ともどうしたの？　もう風呂には入ったんじゃなかったの？」

上ずった声で質問する。意地悪そうにイリアが笑った。

「ボクは入ったよ。だけどもう一度入りに来たんだ」

「私は入っていない。ずっと魔法薬にかかりきりだった」

そういうと二人はヴァイスを見つめてくる。正確に言うと、ヴァイスの胸を。

「すごいねー。大きい上に形もいい。どうしたらこういう風になるのかな」

「……えい」

「ひいっ！？」

アリスに乳首をつねられ、変な声が出た。慌ててタオルで胸を隠す。

「何するの、アリス！？」

「いたずら」

ようやく気付いた。アリスはただ微笑んでいるんじゃなくて、嗜虐的に笑っているのだ。

「ねえ、どうしてこんな時間にお風呂に入りに来たの？」

「ヴァイスと一緒に入りたかったからだよ」

そう言って僅かに膨らんだ胸を張るイリア。思わず視線を逸らす。

――きっとイリア達に他意はない。仲のいい友人として一緒に風呂に入ろうとしているんだ。そうに決まってる！

頭の中で理論武装をすると、ヴァイスは落ち着くために大きく深呼吸した。改めて石鹸をタオルに擦りつけ、丁寧に体を洗う。

その隣にアリスが座り、同じようにして体を洗い始めた。

――イリアと違って、アリスは毛がな……だめだ考えるな僕！

もう顔から火が出そうに熱かった。手早く体に付いた泡を流し、浴槽に向かう。お湯に浸かってようやく邪念が振り払えた。

「疲れたなあ……」

「ヴァイス、肩でも揉(も)んであげようか？」

浴槽の中を泳ぐようにしてイリアが近付いて来る。お湯の中に桜色の先端が透けて見えた。

また顔に熱が上ってしまう。

「イリア。いいの？　僕に裸を見られて」

「え？　別に構わないんだよ。だってヴァイスだもん」

どうとっていいのか分からない答えを返された。恥らう様子がないからきっと異性として見られているわけではないのだろう。

そこにアリスがやってきた。浴槽に浸かると、ヴァイスの背中に抱きついてくる。背中に当てられた平坦な胸の、小さな先端が当たる感触がした。

「ね、ねえ、アリス。離れてくれない、かな」

「駄目。私が満足するまでこのままでいる」

仕方なくヴァイスは心を無理矢理に落ち着ける。これでアリスの精神干渉からは逃れられる。精密な精神制御。これが出来なければアリスと長年付き合うことなど出来はしない。

――そうだ。初めからこうしていればよかった。そうすれば動揺なんてすることは無かったのに。

「気持ちいいねー」
「うん。今日は肩が疲れたから余計にそう思えるよ」
イリアの気の抜けた声にそう返事する。胸というものは結構重たい。そして風呂に入って初めて知ったが、胸というものは湯に浮くものなのだ。

「アリス。もういい？」
「ん。大体満足した」

アリスが背中から離れた。今の時期は暑い。そろそろ上がっておくべきだろう。
浴槽から上がる。火照る体が心地良い。タオルをギュッと絞って体を拭いていく。
ヴァイスに続いてアリスとイリアも浴槽から出た。皆で脱衣所に向かい寝巻を着る。胸の辺りがやや苦しい。黒いシャツが胸のところで大きく膨らんでいる。窮屈（きゅうくつ）だが我慢しなければ。
イリアはゆったりとした黄色い半袖（はんそで）の上と長いズボン。一度目の風呂から上がった時の格好だ。アリスの寝巻は黒いワンピース型で下が透けて見えていた。ネグリジェだ。そのの下には何も穿（は）いていない。
――気にしないことにしよう。動揺すれば足元をすくわれる。
脱衣所を出て、イリアの部屋に戻る。なぜかアリスまでイリアの部屋に入ってきた。

「アリス、どうしたの？」
「私もここで寝る」

もう突っ込む気力もなかった。床に寝そべって毛布を腹の上にかける。すると二人が両脇から毛布の中に入り込んできた。

「えへへ。昔に戻ったみたいだね」

イリアがはしゃぐような笑顔で話しかけてくる。確かに小さな頃はこうしてよく二人はヴァイスのベッドにもぐりこんできた。三人で寝るにはベッドは狭かったけど、二人と一緒にいられることが楽しかった。

月明かりに照らされた部屋で、アリスとイリアがそっと身を寄せてきた。その体の柔かさにどきどきするよりも安心感を覚える。二人の体温を感じながら、ヴァイスは眠りへと落ちていった。

そんな楽しくて恥ずかしい波乱の十日間が終わった。最初の二、三日はひどく騒がれたが、コーラルとアリスに庇(かば)われて何とか貞操は死守できた。

そして今、アリスの部屋で最後の詰めが行われようとしている。試験管の中に濁った紫色の液体が入っている。それにアリスが何事か呟きながら手から生み出した光を注ぎ込んでいく。すると液体が澄んだ青色に変わった。

「完成した」

この十日間、待ち望んだ瞬間だった。アリスから試験管を受け取ると栓を開ける。

「一気に飲み干して。それで魔力を抑制する呪いがかかる」

「呪い！？」

物騒な単語に驚く。本当に飲んで大丈夫なのだろうか。

「問題ない。二十時間程度で呪いは解ける」

その言葉に覚悟を決めて試験管をあおった。あまりにも強いえぐみが味覚を破壊する。慌てて用意されていたコップに入った水を飲む。しかし口の中には凄(すさ)まじい後味の悪さが残った。

そして精霊達に変化が起こった。ヴァイスの周りを飛び回っていた精霊達はヴァイスから離れ、部屋のあちこちを飛び回った。やがて精霊達は壁をすり抜けて森のほうへと向かっていく。

次に、ヴァイスの体に変化が起きた。胸の感覚が無くなり軽くなる。股間に手を当てると、あるべきモノがあった。

「ありがとう、アリス」

「礼はいらない。これは等価交換だから」

「それでも、だよ。ありがとう」

それっきりアリスは黙り込む。こころなしかアリスの頬が赤いように見えた。

こうして、精霊と女体化事件は幕を閉じる。

そして学園は一ヶ月の夏休みを迎えることとなった。

？　精霊　　――Ｓｐｉｒｉｔ――（後書き）

かなり昔に書いた物なので文章が安定していない……。
根底から手直ししたいですけど、余力がなさ過ぎて軽く手直しするに留まりました。
九月以降の予定次第では書き直しの可能性もありますが、それまではこのままで行こうと思います。

？　出会い　　――Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ――（前書き）

没案をそのままアップ。結局この辺りは変更なし。？辺りからプロットを大幅に変えたので、その辺りから先の投稿は随分先になりそうです。

？　出会い　　――Encounter――

学園が夏休みに入り、多くの生徒達は実家へと帰省した。
しかしヴァイスのように帰る先が無い者やあまりにも家が遠い者、その他自主的に学園に残る者もいる。
そんな夏休みの一日目、ヴァイスはアリスと共にイリアに先導されて学園を練り歩いていた。
イリアと約束した遺跡探しである。

「ねえ、イリア。普通に歩いて見つかる物ならとっくに誰かが見つけているんじゃない？」

ヴァイスの質問に、ちっちっちとイリアが指を振る。

「だから先月のうちに聞き込みをしてこんなものを作ってみました！　じゃん！」

イリアが取り出したのは手帳だった。表紙には学園七不思議探索マップと書かれている。

「学園七不思議をたどっていけば遺跡のヒントが見つかるかもしれないよ。それに七不思議が解明出来て二度美味しいこの企画、乗らなきゃ損ってものなんだよ」
「七不思議といいながら三十個以上あるんだけど」

楽しそうに話すイリアに手帳をぺらぺらとめくったアリスが突っ込みを入れる。

「これでも似たような噂は一つに纏(まと)めたんだよ。それでもこんなに不思議が学園にはあったんだ」

一ヶ月の休みは長い。それを考えたら学園不思議めぐりもそれほど悪いものでは無いだろう。

「まずは学園長について。八つの学園の学園長は全て同じ人で、それぞれの学園は普段学園長代理が切り盛りしてるんだけど、長い学園の歴史の中で学園長も学園長代理も代替わりをしたことがないんだ。だから噂だと学園長と学園長代理は人間じゃないんじゃないかって」

「それって、悪魔かもしれないってこと？」

悪魔。黒の森に住み、世界の節理を歪める術、魔法が使える存在。彼らが人間と変わらない姿をしているということをヴァイスは知っている。

「ヴァイス、正解。学園長代理はれっきとした悪魔」

アリスがヴァイスの言葉を肯定する。そのあまりにも断定的な口調にヴァイスは疑問を覚えた。

「どうしてアリスが知ってるの？」

「ヴィヴィとは知り合い。私達はヴィヴィに頼んでこの学園に入れてもらった」

ヴィヴィとは学園長代理の名前だ。

どういう経緯で知り合ったのかは知らないが、聞かないほうがいいだろう。

過去に何かあったのなら、いつか話してくれる時が来る。そう信

じることにする。

「でも、それなら学園長室が怪しいかも」

イリアがそう提案する。確かに学園長室は普段教師以外立ち入らない。その床に地下への階段か何か隠されていてもおかしくはない。

「とりあえず行ってみよう！」

イリアを先頭に、ヴァイス達は学園長室へと向かった。

職員の使う棟に入り、学園長室の扉をノックする。

中からどうぞ、と女性の返事がした。

「失礼しまーす」

「失礼します」

「……」

部屋の中に入る。そこには赤い高級そうな絨毯が敷かれ、大きな木製の机があった。

机の向こうに座っているのは、二十歳を超えているようには見えないくらい若い女性だった。陽光を浴びて輝く金の髪が長く伸びている。

悪魔とはこうも美しい者ばかりなのだろうか。そんなことをヴァイスは考える。

その間にイリアが机を挟んでヴィヴィと対峙した。

「ヴィヴィ。ここには秘密の階段とかそういうのはないの？」

「ありますよ」

「ええええっ！？」

ヴァイスは思わず声を上げる。そんな物がある事とそれを簡単に教えられてしまった事両方に驚いたのだ。

「この絨毯の下に隠し階段があります。これは緊急避難用の隠し通路の入口で、森の中の洞窟と繋がっています」

「へー。そうなんだ」

感心の声を上げるイリア。

だがヴァイスは違った。

緊急避難用。そんなものが本当に必要なのか疑問に思う。そのような非常事態がまるで想像できないのだ。

「しかし、どうしてそのようなことを聞くのですか？」

「遺跡探しをしているんだよ」

堂々とヴィヴィに言い放つイリア。ヴィヴィの反応は、苦笑を浮かべるだけだった。

「そんなものがあるかどうかは私も知りません。学園長なら知っているかもしれませんが、今頃彼女は放浪しているでしょうから……。まあ、学園を壊さないように探検してくださいね」

にこやかに言うヴィヴィ。止められる可能性を考えていたヴァイスは肩透かしをくらってしまった。

「ありがとう。じゃあね、ヴィヴィ！」

「失礼しました」

「……」

学園長室を出る三人。とりあえず一つ目の噂はこれで終了だ。

「嘘をついている」

終始黙っていたアリスがぼそっと呟いた。

「嘘？」

「ヴィヴィは遺跡の場所を知っている。ヴィヴィからは嘘の色が見えた」

アリスがそういうのなら本当だろう。

そして、それが事実であるならば遺跡が実在することになる。

「じゃあ二つめの不思議に行ってみよう！」

そう言うイリアの紅い瞳は期待に染まっていた。

楽しそうに前を向いて歩くイリアのツインテールが一歩ごとに揺れている。

「次の場所は教会だよ！」

そう言うと手帳を仕舞いイリアは走り出した。ヴァイスとアリスもその後を追って走る。

やがて初等部の寮を過ぎたところにその建物は建っていた。

青い屋根に白い壁。十字架が屋根の上に取り付けられている。

名も無き神。この神は教義も何も無く、ただそのシンボルである十字架とそれに祈る風習だけが伝わっている。

主にここを使っているのは初等部の子供達だ。週に一度この教会で祈りを捧げるのがここでの習慣だ。

「この教会では妖精が出るそうなんだよ」
「妖精？」
妖精。それは幽霊と並んで不思議な現象の原因にされてきたものの俗称だ。
地域によって妖精の姿はまちまちで、基本的に胡散臭（うさんくさ）いものの代名詞である。
「夜に光る何かが飛んでるそうだよ。他にも色んな怪現象がおきているみたい」
「それなら夜まで待たなきゃいけないんじゃない？」
というよりこの教会に遺跡の入口があるのだろうか。あまり入口を隠せる場所はなさそうだけれど。
「とりあえず中を調べてみようよ。この教会も古いし、何か面白い仕掛けがあるかも」
教会に入っていく。長椅子が規則的に並び、奥の中央には大きな十字架が飾られている。
早速調査を始めてみた。絨毯をめくり返し、その下の床を確かめる。
壁を叩き、中が空洞になっていないか確かめてみる。
それから壁にはめ込まれた絵が動いたりしないかどうか、床に不自然な点がないかどうか確かめて回る。
「あ」
「ヴァイス、何か見つけた？」
「とりあえず、妖精の正体は分かった」

天井を指差す。そこには青白い光の玉が浮いていた。精霊の光球よりも二回りは大きい。
ウィスプ。魔獣の一種で、人畜無害。廃屋などで見られることが多い。物理的な実体が無い存在なので、基本的に魔術でしか退治できない。

「なーんだ。妖精じゃなかったんだね」
「そんなに妖精に会いたいの？」
「うん！　ボク幽霊は見たことあるけど妖精は見たことないんだ。だから一度会ってみたくて」

目を輝かせるイリア。その様子にアリスが嘆息する。

「イリア。次に行こう」
「あ、うん。次は錬金科の工房（アトリエ）の噂だよ。なんでも工房（アトリエ）の中には惚れ薬のレシピが隠されているんだって」

その言葉にアリスがその紅い瞳を輝かせた。どうやら興味があるらしい。まだ作ったことのない魔法薬なのだろう。

「イリア、ヴァイス。行こう」

一人先に教会の出口に歩いていくアリス。イリアと目をあわせ、二人苦笑してアリスの後を追った。
高等部の校舎の隣。そこに大きめのレンガ造りの建物があった。これが工房（アトリエ）。錬金科の学生が魔法薬の精製などを行なう場所だ。
扉を開けようとすると鍵がかかっていた。まあ、危険物の多いアトリエに無断で誰かが入ったりしない様にしているのだろう。

「ボクが開けるよ」

イリアが扉に手を当てる。どういう原理かわからないが、ガチャリと鍵の開く音がした。

「イリア。鍵を閉めることも出来るの？」

「うん。朝飯前だよ」

得意気に笑うイリア。そしてアリスは扉を開けて先に一人入って行ってしまった。慌てて後を追って中に入る。

中には幾つもの机とその上に置かれた実験道具、そして魔法薬の原料などが入った大きな棚があった。

とりあえず三人で壁と床を念入りに調べてみる。

コンコンコンコン――コーン

壁を叩きながら歩いていると、中が空洞になっているのか音が違う部分があった。押してみると、壁に四角く線が入る。その四角の中心を軸にその部分が回転する仕掛けのようだ。中からは一冊のメモ帳が見つかった。

「アリス！　見つけたよ！」

直ぐにアリスは駆け寄ってきた。メモ帳をめくって内容を確かめていく。

「これは……禁薬の精製法」

禁薬。それは一般的に倫理上問題のある薬を指した名称だ。

アリスの生産している薬の大部分がこれに当たるのではないかとヴァイスは常々思っている。

「惚れ薬についても記述があった」
「本当！？」
イリアが激しく反応する。
「これは――恋愛というものを生殖本能の観点から分析した物の様。……性質(たち)が悪い」
「えっと、どういうこと？」
アリスに説明を求める。アリスはため息をついてそのメモ帳を懐にしまうと、説明をしてくれた。
「恋愛とはつまるところ性欲と直結しているとした上でこの薬は作られている。これは対象を自分に対して軽い発情状態に陥らせる効果を持つ。つまり、媚薬(びやく)」
「なるほど。確かに性質(たち)が悪いね」
そしてそんなもののレシピを懐に納めたアリスも性質(たち)が悪い。実験台にならない様に気をつける必要があるだろう。
そこでヴァイスはふと気付いた。イリアが意気消沈している。
「イリア。そんなに惚れ薬が欲しかったの？」
「うん。だって惚れ薬なんてロマンチックだもん」
人の意思を強制的に改変するような薬のどこがロマンチックなのだろうか。
「誰か惚れ薬を使いたい相手がいるの？」

「いないよ？　ビンに詰めて棚に飾っておきたかっただけ」

イリアに色恋の影はまるでないらしかった。今まで男子から告白されて全てを断ってきたのも、恋愛に興味がなかったからなのだろう。

壁を元通りにして工房（アトリエ）を後にする。そこで昼の鐘が鳴った。

「とりあえず、ご飯を食べに行こう」

寮のところまで戻って学食棟に入る。昨日まではあれだけ騒がしかった食堂が今は閑散としていた。

配膳口からトレイに乗った昼食を受け取りテーブルに座る。

「それで、次はどこに行くの？」

「えっとね、中等部の校舎にあった枯れ井戸だよ。昔その井戸に落ちて死んじゃった子供の幽霊が出るんだって」

学園には湖に注ぎ込む大きな川が流れている。

だから本来必要ないはずの井戸が、なぜか中等部の校舎の傍にあるのだ。

井戸には金属の蓋の上に大きな石が乗っかっていて、中を確かめた者は誰もいない。

「怪しいね」

「うん。確かに」

幽霊のことはさておき、確かにあの枯れ井戸を調べてみる意味はあるだろう。

「ところでアリス。そのメモ帳、一体どんな薬が書かれているんだ

？」

パンをかじりながら先ほど入手したメモ帳を読みふけるアリスに聞いてみた。

「人間を吸血鬼にする薬。一定期間仮死状態になる薬。麻薬。痛覚を過敏にする薬。魔力を増幅するけど意識障害が起こる薬。あと色々」

ろくでもない薬ばかりだった。

そして人間を吸血鬼にする薬というのが非常に胡散臭(うさんくさ)い。

吸血鬼など昔話に出てくる伝説のようなもので、悪魔より信憑性が薄い。

そんな薬が実在するならば、本物の吸血鬼が実在していないとおかしい筈だ。

「精力剤なんかも載ってる。ヴァイス、試してみる？」

「嫌だよ。絶対」

そんなメモ帳に載っている薬なんて危なそうでとても飲む気にはなれない。

「楽しい夢を見続けられる薬もある」

「見続けられるって部分が恐いんだけど」

夢から覚められなくなるんじゃないだろうか。

「お姉ちゃん、ヴァイス。早く食べて行こうよ」

気が付けばイリアのトレイの上はすっかり空になっていた。ヴァ

イスは慌ててスープに口をつける。
そしてトレイを片付けた後で、三人は中等部の校舎を目指した。
中等部の校舎、その傍にある井戸の周りを三人で囲む。
イリアが手をかざすと、井戸の上にあった石が浮き上がって井戸の横に着地した。
金属製の蓋を開けて中を覗き込む。暗くて底が見えない。
アリスが光球を作り出してゆっくりと井戸の中に落としていった。
井戸の中に水は無い。壁の様子は上からではよく分からなかった。

「ちょっと降りてくるね」

そう言ってヴァイスは井戸の縁に足をかけ、その中へと飛び込んだ。背から光の羽が生え、ゆっくりと井戸の底に降りていく。
そして井戸の底に静かに降り立つ。見れば、壁の一部がぽっかりと穴があいていた。人一人くらいなら余裕で通れる大きさだ。穴の先は見えないが、どうやら通路になっているようだ。

「おーい。穴を見つけたよー」

井戸の中を声が乱反射する。イリアとアリスがゆっくりと浮いて降りてくるのを見て、ヴァイスは穴の中に浮いたまま入った。

「今度こそ当たりかな？」
「行ってみれば分かるよ」

光の羽を展開して地面すれすれを飛びながら進む。その後をイリアとアリスが付いてくる。
やがて進んでいくうちに通路が広くなった。そこでは道が二手に分かれている。一方は狭く、一方は広い。

「こっちの通路。もしかして学園長室から続いているんじゃないかな」
「あにゃ、それって……」
これも緊急避難用の通路の可能性が高い。となるとこのまま進めば出るのは遠い森の中だ。
「どうする？　引き返す？」
「とりあえず進んでみようよ。はずれでも面白そうだし」
イリアの言葉に従い、広いほうの通路を進んでいく。半刻ほど歩き続けただろうか。やがて光が進む先に見えた。出口だ。
出てみると、そこは森の中の丘陵部だった。振り返ると、ぽっかりと下に続く洞窟が口を開けている。
「にゃー。はずれか……」
声は残念そうだったが、イリアの顔は笑っていた。冒険が好きなイリアにとって、こういった秘密の通路というのも楽しいのだろう。
遺跡探しだって冒険をするための名目だ。見つけることよりもその過程を楽しむことが重要なのだ。
「それじゃあ、空から帰ろうか。井戸に蓋をしなくちゃいけないし」
そう言ってイリアは宙に浮き上がる。アリスもそれに続き、ヴァイスもそれを追って空に上がった。
森の上空から見ると、ティレクから随分と離れていた。町ごと包囲される状況でも想定しているのだろうか。
この避難用の通路を作ったであろう人物を思い浮かべ、ヴァイスは頭(かぶり)を振った。

多分、面白半分に作ったのだろう。こんなこともあろうかと、というのが大好きな人だ。これもきっとそういったものの一つだ。
空をゆっくりと飛んでティレクへと向かう。
高速で飛ぶことも出来なくはないのだが、高速飛行用のゴーグルを持ってきていない。ゴーグル無しでは強風に涙が止まらなくなり、前が見えなくなってしまう。
そして中等部の井戸の所に降り立つ。蓋を閉めてイリアが魔術で石を載せた。
これで枯れ井戸の秘密も分かった。幽霊のことは分からなかったが、イリアが気にしていない様子なので黙っておく。

「次は――夜になると現れる扉。学園のどこかに夜にだけ現れる扉があるんだって。だけど、見えるだけで触る事は出来ないみたい」
「それは夜にならないと確かめられないね。その次は？」
「図書館の影。誰もいないのに、図書館の床に歩いている人の影が現れる。……誰かが魔術を使って姿を消していただけじゃないのかな」
「いや、そんな事イリアにしか出来ないと思うよ」

そうかなあ、と呟くイリア。
姿を消す魔術などヴァイスは知らない。
そんな物が使えるとはイリアから聞いた事はないが、そのような事を言うからにはそういった魔術を開発した事があるのかもしれない。

「とりあえず図書館に行こうよ。もしかしたら遺跡の入口が隠されているかもしれないし」

そうイリアが提案する。あの広い図書館を調べて回るのは骨だが、イリアはひどく楽しそうだ。

「ねえ、イリア。遺跡が見つかったらどうするの？」
「もちろん、探検だよ！　学園の秘密だよ？　面白そうだよ！」
元気いっぱいの返事が返ってきた。こんなに楽しそうな笑顔を見られるのだから、それだけでも手伝う意義がある。
「分かった。図書館に行こう」
「……（こくり）」
無言で頷くアリスと一緒にイリアの後について図書館に向かう。ちらりとアリスの様子を見る。その表情からは何も読み取れない。だが、少なくとも嫌がっているということはなさそうだ。
図書館に入る。窓が全て開かれていた。司書の人はいないようだ。無人の図書室を三人で手分けして調べる。
床をコツコツと鳴らしながらちらりと影を見るが、七不思議の影は見当たらない。
それを少々残念に思いながら図書館を回る。
そして図書館で最も怪しい場所に三人は集まった。
古い文献が収められた蔵書室。かかっている鍵をイリアに開けてもらい、中に入る。
蔵書室には窓がない。そのためアリスに明かりの光球を部屋中に飛ばしてもらい、明るくなった部屋の床や壁を慎重に調べて回る。
「あっ！」
「見つかった？」
声を上げたイリアの元に近付いていく。そこではイリアがボロボロの本を手に取っていた。

「旧世界の文献だよ、ほら！」
「ホントだ。えーと、『虚数空間論』？」
「ヴァイス、英語が読めるの！？」

イリアに大層驚かれた。アリスも何事かと近付いてくる。

「えっと、昔教わったことがあるんだ。それよりイリア。何で英語を知ってるの？」

その質問にわたわたと手を振るイリア。かなり動揺している。

「えっと、それは……秘密！　そう、秘密だよっ！」
「分かった。聞かないで欲しいならそうする。……ところでイリア、遺跡は？」
「そ、そうだね！　遺跡を探さないと！」

本を棚に戻し、慌ててヴァイスから離れていくイリア。ヴァイスはそのままその棚を眺めて、ふと棚の下に積まれていた古びた紙の束を手に取った。

「これは……学園を造ったときの記録？」

その紙には学園の図が載せられていた。めくってみると、建設の際の詳細な記録が載っている。

そこで、ふとヴァイスは奇妙な事に気が付いた。

「ねえ！　これを見て！」

床を調べている二人に呼びかける。近付いてきたイリアとアリスにその紙を見せた。

「これ。ここを見て。学園が建設された時、一番初めに時計塔が造られたんだ」
「あ……ほんとだ」
「しかもほら。校舎や寮は設計図があるのに、時計塔だけ設計図が無いんだ」

ぺらぺらと紙をめくる。そこには校舎などの図面があった。しかもその中には隠し通路の設計図まで含まれている。
それなのに、時計塔だけ設計図が無い。怪しい事この上なかった。

「あと、今気付いたんだけどどうやって時計塔は動いているんだろう。誰かが管理しているわけでもないのに、ずっと動き続けているなんておかしいよ」
「うん。じゃあ、時計塔に行ってみよっか！」

棚に資料の束を戻し、蔵書室を閉める。無論鍵をかけなおすのも忘れずに。
そして三人は時計塔へと走った。学園の中央に位置する大きな鐘のある時計塔は、今日も狂うことなく時間を刻み続けている。
この時計塔を当たり前と受け入れていた自分を恥じる。
誰も調整せずに二十四時間という時間を毎日正しく刻む時計。
長い間風雨にさらされて錆びることのない大きな鐘。
そして謎の動力源。
これ以上怪しい施設はこの学園には無いだろう。

「鍵を開けるよ」

イリアが扉を開く。開かれた扉の中には、一面の黒い壁があった。
中に入って通路を歩いてみる。どうやらこの四角い時計塔の中心

に大きな円筒状の壁があるようだ。
ぐるっと一回りして見つけたものは、上に上る階段のみ。
「上に行く？」
「……もうちょっと探してみよう。もしかしたら見落としがあるかもしれない」
アリスの質問にそう答える。まずは円筒状の壁を調べる。
破壊すれば中に入ることは出来るかもしれないが、それはヴィヴィから釘を刺されている。
次に床。一メートル四方の石が敷き詰められている。一つ一つ丁寧に見て回ると階段の裏の石の一つだけ溝が深かった。
「イリア。この石を持ち上げてもらえる？」
「うん。分かった」
イリアが石に手を当てる。すると立方体の石が空中に浮き上がり、四角い穴が姿を現した。
アリスが光を穴の中に入れる。どうやら下に部屋があるようだった。
「これが、遺跡の入口？」
「かもしれない。入ってみよう」
「うん！」
イリアが穴の中に飛び込む。そして穴の底で幾つもの光が灯(とも)った。
照らし出されたのは銀色の狭い空間。遺跡によく見られるという金属製の壁だ。
ヴァイスも四角い穴に飛び込む。その後にアリスが続いた。
イリアの光に照らし出されたのは上に続いていると思われる円筒

状の壁。ただしこちらは壁が金属で出来ている。
部屋を回っていくと、通路への出口があった。通路は左右に伸びている。

「よし。右に行ってみよう！」

興奮気味なイリアに続いて通路を歩いていく。通路の先には閉じられた金属製の扉と下へと続く階段があった。

「スライド式の扉だね。電力の供給がないと開きそうにないよ」
「イリア、よく知ってるね」
「あ、うん。そういう知識はあるんだ」

少しイリアの言葉が気にかかった。少しだけイリアの持つ空気が暗くなったからだ。
だが、次の瞬間にはイリアは持ち前の明るさを取り戻していた。

「とりあえずここは後回し。まずは下に行ってみよう！」

そう言って階段に突撃していくイリア。アリスと一緒にその後を追う。
階段を下りた先は天井の高い部屋だった。壁の上部にでっぱりがあり、そこからはガラスで部屋が見下ろせるようになっていた。

「あの扉はあの部屋のものだったみたいだね」
「でもここは何をする部屋なのかな」

イリアとアリスの明かりに照らされた部屋には何もなかった。ただ、床が大分黒ずんでいる。

「まあいいや。今度は逆の道に行ってみよう」

イリアにしたがって下りてきた部屋の前に戻り、逆の道へ行く。
そこには通路の左右にぽっかりと空いた二つの入口と突き当たりにある閉じられた扉、そして下へと続く階段があった。
まずは通路右手の入口に入る。その部屋には椅子型の機械が三台設置されていた。

「学習装置（インストーラー）……！」

思わず呟く。この機械についてはヴァイスの知識にもある。

「ヴァイス、知ってたの？」
「うん。脳に直接情報を書き込む機械だよ」

そこでふと気付いた。一つだけ椅子の隣にあるコンソールの赤いランプが付いている。これだけ電気が通っているのだ。
疑問を噛み殺し反対側の部屋へと向かう。
そこには大きな試験管を逆さまにしたような装置が五台設置されていた。これもヴァイスは知っている。

「培養槽……」

今度はイリアも何も言わなかった。だがこれが何か知っているのだろう。表情が随分神妙なものになっている。
ここも一つだけ培養槽のガラスの中に液体が入っていないものがあった。それが意味することは、おそらく――

「下に行ってみよう」

イリアの静かな言葉に小さく頷きを返し、部屋を出て階段へ向かう。
そして階段を下りた先にあったのは、カプセル状の機械だった。
ただし壁に大きな穴が開いていて、そこから幾つものケーブルがカプセル状の機械に繋がっている。
おそらくこの機械は外から持ち込まれたものなのだろう。
ヴァイスはカプセルの上部の丸いガラスから中を覗き込む。
そこには、女性の顔があった。
カプセルの横に取り付けられた操作盤にイリアが触れる。
表示された画面に対し、イリアは迷うことなくコマンドを入力していく。

『声紋認証を行ないます』

表示された画面にイリアがうろたえる。

「……どうしよう、ヴァイス」
「ロックがかかってるの？」

イリアに言葉を返した次の瞬間、ピッという電子音が響いた。

『声紋照合。ヴァイス・アンヘル――――――承認。解凍作業を実行します』

カプセル型の機械――冷凍睡眠筐体（コールドスリープポッド）から冷たい霧が噴出する。しばらくすると霧は全て消え失せ、カプセルが開く。
中から出てきたのは真紅の長い髪をした女性だった。その白い肌とは対照的な、黒いぴっちりとした上下のアンダーウェアを装着している。
そして女性が目を開いた。翡翠を思わせる緑の瞳がヴァイス達を

捉える。
「……ヴァイス・アンヘルはあなたですか？」
「へ？」
上体を起こし、質問してきた女性にイリアが素っ頓狂な声を上げる。
慌ててイリアはヴァイスを指差した。女性の視線がヴァイスに移る。
「僕がヴァイスだよ。君は？」
「私に名前はありません。製作者はヴァイスに名前をつけてもらうよう指示しました」
「僕に？」
製作者が誰なのか、ヴァイスには見当がついている。
いつだったか機械に声を記録させられた記憶もある。
どういう意図であの人がこの女性を生み出したのか知らないが、確かに名前が無いままではかわいそうだ。
「わかった。その前に聞かせて。君は何者なの？」
「私は人造人間（ホムンクルス）です」
「ほむんくるす？」
ヴァイスはイリア達に振り返る。イリアもアリスも首を横に振った。彼女達も知らないらしい。
「人間を模して生み出された、核にフィロソフィアストーンを使用した人工生命体のことです」

あくまで事務的な対応。
おそらく彼女は上の培養槽で生み出され、脳に知識だけを強制入力（インストール）されてここで眠りに就いたのだろう。
「私は学習装置（インストーラー）から二つの指示を受けました。ヴァイス・アンヘルの傍に侍（はべ）り仕えることと、ヴァイス・アンヘルを試すことです」
「試す？」
「私と戦闘を行い、五分間生き延びること。これが学習装置（インストーラー）からの指示です」
物騒な事を言う女性。五分間生き延びろとはどういう意味だろうか。
「とりあえず、その前に名前だよね。名前、名前……」
いい名前が思いつかない。うんうん唸（うな）ること三分。ようやく思いついた名前を口にする。
「名前、ユーリでどう？」
この女性を生み出したと思われる人物の名から一文字取ってみた。それを聞いて女性は小さく頷く。
「ユーリ……。認識しました。私の個体識別名称はユーリです」
無感動に淡々と話すユーリ。その様子に既視感（デジャブ）を覚える。
それは造られた者達特有の感覚。知識のみが先行し、経験を重ねる事で個性というものを確立していく。
おそらく、ユーリもこの学園で過ごしていく内に少しずつ生の喜びというものを手に入れることが出来るだろう。

ユーリが筐体（ポッド）から床に降り立った。背が高い。ヴァイスも背は決して高くないが、ユーリはヴァイスより頭一つ分は高い。
長い前髪をさらりと流し、ユーリが口を開いた。
「では試練を始めます。付いて来て下さい」

ユーリに先導されて連れてこられたのは、反対側の階段を下った先の大きな部屋だった。
イリアとアリスは壁際に。ユーリはヴァイスと距離を取り、部屋の中央に立つ。
「これから戦闘を始めます。戦闘制限は五分間。時間は私が計測します」

淡々と告げるユーリ。
ホムンクルスというものがどのようなものかは知らないが、生き延びるというおっかない指示が出されるほどだ。決して油断は出来ない。
「では、始めます」

瞬間、ユーリの姿が消えた。ユーリは寸前までヴァイスの居た位置の前に現れ、跳んだ勢いを殺そうとしてつんのめり、三回前転をして立ち上がった。
ユーリの突進を避けられたのは偶然だ。
ヴァイスはユーリが開始の合図を出す前にサイドステップをした。それがヴァイスをユーリとの衝突から救ってくれたのだ。

「私の身体能力が一瞬著しく低下しました。ヴァイス・アンヘル。あなたは何をしたのですか」
「僕の事はヴァイスでいいよ、長いから。僕の近くに寄ると、魔力で強化された分の身体能力は失われるんだ」
質問に答えながらいつでも動けるよう小刻みにステップを踏む。先程の様な勢いでぶつかられたらダメージも半端なものでは無い。
「理解しました。では、これでどうでしょう」
ユーリの周囲に六つの赤い光球が生まれる。それらがとてつもない速度でヴァイスに殺到した。
「っ！」
へその下に力を入れる。光弾はヴァイスに触れるその直前で砕け散って消えてしまった。
「魔法を消去した？　……分かりました。あなたは摂理の力を行使するのですね」
ユーリが呟いた言葉の意味は理解できない。
が、とりあえずユーリがヴァイスより遥かに高い身体能力を持つ事と、悪魔にしか使えないという魔法を使えるという事だけは解った。
そしてヴァイスが身構えた瞬間、ユリアが再び床を蹴る。
今度の跳躍は先程より勢いが無かい。
そのためヴァイスはユーリの動きをはっきりと見ることが出来た。
ユーリはヴァイスの前に着地し震脚から拳を突き出す。
それを体をひねることで躱(かわ)し、ユーリの鳩尾に右拳を叩き込む。

さらにくの字になって宙に浮くユーリの側頭部に左足で回し蹴りを加えた。
右に吹き飛び倒れこむユーリ。
だが、まるでダメージが無いかのようにユーリは平然と体を起こした。

「言い忘れましたが、私の体は多少の怪我であれば即座に回復します。私への攻撃に手加減は不要です」

ユーリの宣告に愕然（がくぜん）とする。
今のはヴァイスにできる最大の攻撃だった。それがダメージを与えられないのであれば、ヴァイスにユーリを倒す手段は無い。
五分間という時間制限はこの為のものだったのだとようやく理解する。
再びユーリの体が消える。
肩からぶつかってきたユーリにあっけなく吹き飛ばされる。
そのショルダータックルに息が詰まり咳き込む。そこに追いついてきたユーリの蹴りを受けて床に転がされた。
ヴァイスの能力（チカラ）で身体能力は低下しているはずなのに、それでもなおヴァイスを宙に浮かせるほどの威力の蹴りを放ったのだ。
体を起こした瞬間、手足を使って横に十メートルほど跳躍する。
見ればヴァイスが居た所の床にユーリの拳が突き刺さっていた。
ヴァイスはユーリが動くよりも早く横に跳躍する。
その次の瞬間にはヴァイスの居た空間に蹴りが放たれていた。
ユーリの行動を先読みし、実際に動くよりも先に動かなければなぶり殺しにされてしまう。
そして次の瞬間ヴァイスの目の前にユーリが現れ――その側腹にヴァイスの膝が食い込んでいた。ヴァイスはユーリが動く前に既に蹴りを放っていたのだ。
だがユーリは一瞬顔をしかめただけで、ヴァイスの腹に拳を叩き

込んだ。
ごほ、と肺の空気が押し出され、それでも体を動かしてしゃがみ込む。
その頭上をユーリの蹴りが通過していった。ヴァイスが最初に仕掛けた攻撃をそのまま返してきたのだ。
しゃがんだ体勢から足払いを仕掛ける。軸足を刈り取られ転ぶユーリから距離をとった。

――まともにぶつかり合ったらこっちがやられる。逃げ続けて時間切れを待つしかない！

だが、ユーリは一歩、また一歩と歩いて距離を詰めてきた。
ヴァイスの攻撃は一瞬しかダメージを与えられない。
逆にユーリは身体能力が低下しても重い一撃を繰り出せる。
先に攻撃を繰り出したところでやられるのはヴァイスの方だ。
サイドステップで弧を描くようにユーリから距離をとる。
ヴァイスに向かってゆっくりと足を勧めていたユーリが強く床を蹴った。
静から動への瞬間的な変化に反応が遅れる。
なんとか体を捻ると、ヴァイスの横腹をユーリの貫手（ぬきて）が掠（かす）めた。
シャツが破れ、掠（かす）めた肌には赤い線が走る。
お返しとばかり無理な体勢からユーリのあごに拳を見舞った。
威力は無いが脳を揺さぶる一撃にユーリは崩れ落ちる。
ヴァイスが後ろに飛びのくと、倒れたユーリは直ぐに起き上がった。

「脳へのダメージも回復するのか……」

どういう原理かは分からないが、これでユーリを昏倒させることは不可能だという結論に達した。

ヴァイスに残されたのは、無様に攻撃を受けながらなんとか致命的な一撃を避けるという道だけだ。
至近距離で放たれる拳を両腕でガードし、頭部への蹴りを躱し、隙あらば反撃に移って僅かに動きを止めて距離をとる。
「反則もいいところだよ……！」
愚痴をこぼした瞬間、懐にもぐりこまれた。
「しまっ――」
「終わりです」
世界が一瞬で闇に染まった。あごに拳を打ち込まれたのだ。
背中から倒れこむ。ユーリは倒れたヴァイスの上に馬乗りになり、拳を振り上げ――その拳を静かに下ろした。
「……？」
ユーリはヴァイスの上から立ち上がった。ヴァイスは鈍くなった体を無理矢理起こす。
「五分間が経過しました」
どうやら無事乗り切ったらしい。緊張が切れて、力なく倒れこむ。
「ヴァイス！」
イリアが叫び声を上げて駆け寄ってきた。手をひらひらとさせて無事だと伝える。

「治癒(キュア)をかけましょうか？」

ユーリが無表情なまま感情のこもらない声でそう言った。

「無理だよ。ヴァイスに魔術は効かないんだ。例えそれが治癒(キュア)であっても」

イリアがユーリに説明する。その間に近寄ってきたアリスが懐から試験管を取り出した。

「治癒の魔法薬。貴方が体の周りに張り巡らせている魔力は魔力素を世界の裏に追放するけど、体内の魔力は逆に魔力素を吸収して身体能力を向上させている。だから、服用者の魔力を使用する魔法薬なら効果がある」

「……副作用は？」

「極端に眠くなる。それだけ」

アリスから試験管を受け取り、栓を抜いた。

そのまま澄んだ緑色の甘ったるい液体を飲み干す。

試験管をアリスに返したところで猛烈な睡魔に襲われた。

重くなったまぶたを閉じ、床に再び倒れこむ。

そしてヴァイスの意識は深い闇へと飲まれていった。

ヴァイスは目を開いた。見慣れた天井が目に入る。

どうやら寮の自室のベッドに寝かされていたようだ。

体を起こすと、三人の少女が部屋の真ん中でテーブルを囲んでいるのが目に入った。

「あ、起きた」

「イリア、あれからどうなったの？」

近づいてきたイリアにとりあえず質問する。

「ヴァイスが眠った後、とりあえずここにヴァイスを運んできたんだよ。大丈夫？　痛いところはない？」

体をあちこちさわってみる。どこにも異常は無い。

シャツから覗く薄く切れたはずの脇腹にも傷は無くなっていた。

「うん。大丈夫みたいだ」

「よかった。ところでユーリのことなんだけど……」

ちらりとユーリのほうを見る。その視線を受けてユーリはヴァイスのほうを向いた。

「私に下された指示はヴァイスの傍に侍(はべ)り仕えることです。私は万難を排し、これを実行します」

「いや、そんなのやらなくていいから。それよりユーリのこれからのことなんだけど……」

「ヴィヴィに話は通してきた。ユーリは特待生として私達の科に編入させることになった」

ヴァイスの懸念にアリスが説明をしてくれる。

「ただし女子寮に入ることが条件。ユーリはそれを拒否した」

「私は常にヴァイスの傍にいなければならない。それが私の使命です」
「ちょ、ちょっと待って。もしかしてここで暮らすつもりなの？」
ヴァイスの言葉に頷くユーリ。
「駄目だよ。その、君だって女の子なんだから……」
「私に興味があるのですか？　私は生殖行為は出来ますが、生殖能力がありません。子供ができる心配はありませんが」
「いや、みだりにそんなことをしちゃいけないんだって！　君は女子寮で暮らすの！」
「それは命令ですか？」
命令。ユーリはヴァイスに仕えると言っていた。ヴァイスが命令すれば従ってくれるかもしれない。
「うん、命令だ。卒業するまで学生として女子寮で暮らすこと。あと学園の規律を守って生活して欲しい」
「……命令でしたら仕方ありません」
あきらかに不服のオーラを出しながらユーリがしぶしぶ承諾する。学園に学生以外の人間がいれば問題になるし、学園から放り出すわけにもいかない。
言うことを聞いてヴィヴィの温情に甘えさせてもらうのが得策だ。それにヴァイスも男である。同じ部屋で寝泊りしたり、あまつさえ風呂に付いて来られたりしたら理性が持たないかもしれない。
そんなことを考えていると、ついユーリの胸に視線がいく。
十分過ぎる程立派な大きさだった。ヴァイスが女の体になったときとそう変わらない大きさのように見える。

「じゃあボク達はヴィヴィに会ってからユーリを女子寮の部屋に連れて行くね」
「あ、ちょっと待って」
立ち上がるイリアの手を取って引き止める。
「本当は誕生日まで待つつもりだったけど、今日召喚を行うよ。夜九時の鐘の後、あの木の下まで来て欲しいんだ」
「うん。分かった」
「……（こくり）」

イリアが嬉しそうに微笑み、アリスが無表情のまま頷く。
どうでもいいけれど、ユーリとアリスを同じ部屋に置いておくと一言も会話をしないんじゃないだろうか。
三人が部屋を出て行く。ヴァイスは机の奥から古びた紙を取り出した。そこには蛇と二匹の狼が描かれている。
ふと窓から外を見る。山の上で赤い夕日が輝いていた。
窓を開けて宙に浮かぶ。そのまま窓から出て空高くに上っていく。
見下ろした町と湖は夕日の光を照り返し赤く輝いていた。
その景色を見て気持ちを入れ替える。
小さく時計塔の鐘の音が聞こえた。
夕食の時間だ。
ヴァイスは名残惜しげに湖を見つめ、学園へと降りていく。
そして、夜が始まった。

？　出会い　　――Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ――（後書き）

東方と他の練習作の方をしばらく優先するので次話は相当先になります。ご容赦下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6939t/

Phantasma

2011年7月27日22時34分発行